菅原傳授手習鑑

作者
竹田出雲　並木千柳
三好松洛　竹田小出雲

○第一

蒼々たる姑射の松化して婥約の美人と顯われ、珊々たる羅浮山の梅、夢よ清麗の佳人となる、皆是擬議して變化をなす、豈鹹の水精ならんや、唐土計りか日の本よも人を以て名付るよ、松と呼梅といひ、或い櫻よ准れば花よも情天滿、大自在天神の位自愛有し位神詠、末世よ傳へて、有がたし、此神いまだ人臣よまします、時菅原の道實と申奉り、文學よ達し筆道の奥儀を極め給へば、才學智德兼備わり、右大臣よ推任有、權威よ漫る左大臣、藤原の時平よ座を列ね、菅丞相と敬われ、君を守護し奉らる延喜の、

は代ぞ豐なる。然るに主上此程ゑは風の心地迚病の床に臥給ふ、天顏を親ひ奉らんと、は弟宮無品齋世親王、參内のは供まゐ院の廳の官人、判官代輝國階下に、伺公仕れば、席を正して丞相に打向ゐせ給ひ今朝院參致せし所法皇仰有樣ゐ當今のは惱日を追て快然ならず、急ぎ齋世に參内し龍顏を拜しは樣子、有の儘に告知せよと判官代を相添らるは樣躰いかゝ渡らせ給ふやらん、曾丞相正笏有、さしてはかゐりもなくひ、委ゐ道實には尋有んよりゐ直に天氣を親ひ給へ然らば左樣に致さんと、時平にも挨拶有常寧殿に入給ふ、かゝる所へ式部省の下司春藤玄番の允友景罷出庭上に頭を下け、今度渤海國より來朝せし唐僧天蘭敬が願ひまゐ、唐土の徽宗皇帝當今の聖德を傳へ聞、何卒天顏を拜し奉り、は姿を畫に寫し歸國せよ、其畫を則日本の帝と思ひ對面せんとの望に付、數〻の饋物、則是にひと庭上に餝すれば曾丞相聞給ひ、珍らか成唐僧が願ひ、

當今延喜の帝、聖王よて在す事隱れなく、ゐ姿を拜せんと唐の帝の望み、直よ我國の譽なれ共、折惡敷天子のゐ惱有の儘よ云聞せ、音物も唐僧も唐土へ歸されんや、時平の了簡まし、ますかと仰よ冠打振て、そふでない道眞、ゐ病氣と申聞してもよも誠よい思ふまじ、延喜の帝い、聖王でも、趾か跛か瞎か缺唇か膝行か、天皇らしうない形故、病氣といふい間よ合と云る、しい日本の疵、面倒な事いいさんより、ゐ形代を拵へ天皇と僞つて、唐僧よ拜ますれゞ何事なふ事い濟、誰彼と云んより此時平が代りを勤め、袞龍のゐ衣を着し、天子よ成て對面せんと一口よ云放す謀叛の萠ぞ恐ろしき、判官代輝國階の下よづゝと寄、事新敷嚴命、唐土の天蘭敬い、時平公のゐ姿を寫しよい參るまじ、皆上つて頤廣く、顴高き延喜帝、唐僧がよも呑込まい、神武以來獨の惡王、武烈天皇の名代ならゞ時平公が幸究竟、當今のゐかいりとい鹿を馬との出損ひ、、、ゐ無用と嘲笑ふ舌長し

輝國踏れやつと呵付、ヤツ〳〵玄番天蘭敬を内裏へ伴へ、天子よりの此時平用意せんと立所を、菅丞相とゞめ給ひ、時平の仰の天子の爲は形代とのさる事なれ共、若も彼僧相人よて、君臣の相を能見るならば王孫よ有ぬ臣下と云るべし、其時いかゞ仕らんと、理屈よ時平行當れば三善の清貫進出、菅丞相の詞共覺へず、彼妖主を相人との、餘りな先ぐり念よ念が入過る、左中辨希世殿そふじやないかと指出口、イヤ是念よ念を入れてさへ過仕落の有ならひ、仮初ならぬ唐土人は對面の事なれば、輕〳〵數計のれず、と、暫しが間は思案有、所詮天子のは代り人臣の成がたし、幸ひは同腹のは弟宮、齋世の親王を今日一日の天子と仰ぎ、は姿畫を唐土迄傳へて恥ぬは粧ひ、此義いかゞと理よ叶ふ、詞よ違ふ時平が工み目と目と三善の清貫も、日あんごりと明居たる、玉簾深き一間より伊豫の内侍立出給ひ、兩臣のは諍ひ我君委しく聞し召れ朕が代りの齋世の宮と直〳〵の勅諚

よて、只今は衣を召替給ふ、此由ヲ傳へよとの仰よてしゝと内侍ゝ奥よ入給ふ、時平ゝ俄よむつと顔輝國が悦喜の眉開く扉ゝ日花門玄番ノ允が案内よて、渤海國の僧天蘭敬、倭朝よかゝる衣の衫、庭よ覆ひて畏る、唐土の僧天蘭敬とゝ汝よな、龍顔を寫し奉らんとの願ひ叶ふゝ汝が身の大慶有がたく存じ奉れと、時平が指圖よ警蹕の聲諸共よ高くと、は簾巻上る其内よゝ、弟宮齋世の親王金巾子の冠を正し、は衣爽よ見へ給ふ實王孫の印迦、唐僧始め坐列の官人わつと、ひれ伏敬へり、天蘭敬漸頭を上玉體をつく〳〵と拜し奉り、ハ、ア天晴聖主しゝや、我國の徽宗皇帝慕いるも理り也、三十二相備ゝつていゝん方なきは形、勿躰なくも僕が筆よ寫し奉らんと、用意の畫絹硯箱、檜の木の燒筆さら〳〵と、眉のかゝり額際見てゝ寫し、書てゝ拜しは笏の持せやうは衣の召ぶり違ひなく、即席書の速さ顔輝が子孫か只ならぬ畫筆の、妙を顯ゝせり、判官代ゝ差心得捧物取納れゞ、重て奉錄賜てんぞ旅館よ歸れと道眞の下知を請繼春藤玄番、お

暇ヲさせ唐僧を伴ひてこそ退出す、歸るを待て時平大臣玉座よりかけ寄、齋世の宮の髑髏んで引ずり出し、ほ衣も冠もかなぐり〳〵、唐人が歸つたれば暫も着せてい置れぬ九位でもない無位無官よ着せた裝束此冠穢れた同前、内裏よ置ず我が預かる今日の次第い右大臣奏問せられよ身い退出罷歸るとほ衣冠奪取て行んとす、道眞立て引取給ひ、聊爾也時平、勅もなきほ衣冠私よ持歸り、過て謀叛の名を取給ふやと、何心なく身の爲をいゐるゝ身よい胸よ釘頭ゆがめて閉口す、齋世の宮菅丞相よ向い せ給ひ、天子序の勅定よい、老少不定極りなし何時しらぬ世の中よ名計殘すい其身の爲、道を殘すい末世の爲、妙を得たる筆の道傳ふべき總領い女子なれば是非よ及ばず幼ければ弟の菅秀才よも傳ふまじ弟子數多有菅丞相器量を擇て筆道の奥儀を授長き世の寶とせよとのほ事と、仰の中よ左中辨宮の前へずつと出、菅丞相の弟子の中位といひ器用といひ希世よ上越手書いなし、幸ひ是よて傳授有れと、ほヲ付下さるべ

しと云せも敢ず、菅丞相よつてと打笑、内裏よ有時ゝ我傍輩筆法ゝ我弟子なれば、此道よおいて師匠を指置、我儘の願致されなと誡の詞嚴しと襟を繕ひ勅答よゝ、有がたき君の惠、我筆法の大事よゝ、神代の文字を傳る故七日の齋七座の幣神道加持よ唐倭文字ゝ何萬何千よも、我筆道よ、漏しゝなし、それ共ゑらず爰かしこよ手習ふ子供も皆我弟子、けふが私宅よ閉籠、擇出して器量の弟子よ、筆傳授ヤべしと、宣ふ詞ゝ今の世よ傳へて殘る筆道の、道のは名よ顯れて眞成かな誠なる君が、は代こそ豐なれ、引捨る車ゝ松よ輪を休め、舍人二人ゝ肘枕、二輛並べしは所車かたへゝ藤原かたへゝ菅原道眞公の名代ゝ左中辨希世、時平公の代參ゝ三善の清貫、加茂明神へは惱の祈願、神子が湯浴の其間眠るむまさゝ加茂堤、夢よ夢をや結ぶらん、松吹風よ菅原の舍人梅王丸目を覺し、こりやゝ松王丸、そちが主の時平公ゝ短氣者でも根が大鳥、名代よわせた清貫殿ゝ短いくせよ根が悪者、呼使を請ぬ内目を覺して行いでな、梅王の云ゑ

〻事いいの、こなたの主の名代よ來た希世殿こそ大邪人、蓼喰虫も好〻とあのわろを弟子よ云たり、代參よおこしたりなさるゝ、皆丞相のお心が云りたい、そりやそち達が小い了簡とい違ふ、聖人の胸の廣さい、こちらが身よも覺への有事、齋世の宮樣の車を引、櫻丸とわれとおれと三人い、世よ希な三つ子、顔と心いかいつても着物い三人一云よ、ひよんな者產だと親父が氣の毒よ思ふたをお聞なされ、三つ子い天下泰平の相、舍人にすれば天子の守と成、成人さして牛飼よ指上よと、皆丞相樣のお取成でば扶持迄下され、親四郎九郎殿い今佐太村のば領分よば寵愛の梅櫻松を預り、安樂よ暮して居らるゝ、其御寵愛の三木の名を我〻よお付なされ、おれを兄のお心でか梅王丸とお呼なされて召使いる、其方い松王丸櫻丸い宮の舍人、ゑぼし親と云ば恩のば方、家を隔てゝ奉公する共、必仇疎よ思いぬがよいぞよ、〻〻〻と永談議說人、もふ齋世

の宮もお參りなされ、牛休めよ櫻丸も來さうな物、何ぞ用か有か、ハテ佐太村の親父殿から、來月ハ七十の賀を祝ふ程よ、三女夫連でこいと人おこされた、其事云ハふと思ふて、メリヤ銘〳〵よ人が來てよふ知てゐる、思へば親父殿ハおハすからすよ子三人と、果報な人でハ有ハいなァと、兄弟咄しの其中へ同し胤腹一時よ生れて年もおないとし、どれが兄共弟共梅と松とよ櫻丸、三幅對の車引てかげよ一輛引捨て、堤の上から是ハ〳〵、ふたり共ゆつくりとして居らるゝ、ハ神事も早半過、呼立られぬ中よ行たらよかろと、眞顏でいへば梅王丸、ハ神事が濟だら宮樣からお立で有が、そちや又爰へ何しよきたイヤこちの宮樣ハ神司の方で、ハ休足有故お立の程が去れぬこなた衆の乘て來たハ名代の衆ハ、禁庭のハ用が有迎立騷いで居たぞや、油斷して呵られまいといふよ松王いか樣役なしの宮樣と時平公のお目鑑で、ハ用繁き清貫樣とハ違ふ、何時去れぬいざ行と、車

よかゝれば待松王、清貫樣がお立有れば此梅王がお供をした希世の卿も同然、万一お立でない時は、あの大勢の群集の中へ二輛の車を引かけて、怪我さしてもそこねても、不調法は舍人の誤り、一走りして樣子を見て取よ歸る迄の事、休んだかはりぞやアこいと、引連立て兩人は宮居の方へ走り行、跡見送りて櫻丸、ハヽヽ一ぱいくふていたは〳〵と、獨言して相圖の手伯手、招けば招かれ戀草の、露踏分て十五六、被の風の優しきは、菅丞相のお娘、かりや姫迚色も香もあり、父ぢのお家がら、くどき落して宮樣よ逢せませんと跡よ付供は八重迚花めきし、櫻丸が自慢の女房先へ廻りてコレこあのお人、首尾はよいかと問へば點頭、よい共〳〵、けふ此加茂堤にお車の休所、人どめして一人も通さの鼠の子もない所と思ひ、宮樣をそびき出して來た所よ梅王や松王がどんぐり目玉よはつと草臥、一生よつかぬ嘘を又ついてまんまとちらして仕廻た、姫君樣恥しそふな

顔せず共お出〳〵、ドリヤ開帳仕らふと、車の扉を引上れば、齊世の宮い面
懶げよ、姫い猶しも顔見合せ、よつと笑ふて袖覆ふ、ヤア爰らが下ゝと違ふ
て飛付して輕業もさせよくね、女房共、くら闇よしたいな、何のいな畫玄
や迚、結構な車の内ゝ、すばやいやつでい有ぞ、我等い暫しお暇と、てかげ
へはいれば、それ〳〵、こんな時よい男い邪魔お姫様、ヤ下たい事有らば
違慮なしよおつゝやれと、つき、やられて対屋姫、千束のみのお返事よ首
尾あらばとのは談、有がたいやら嬉しいやらけふの此首尾待兼てお呵
受よ參りしと袂くいへて宣へば、齊世の宮も十七のいとまだ若き初戀
よ何と云寄品もなふ、櫻丸がいかゐ世話、み見る度よいやまさり逢たか
つたよよふてそ〳〵、嘸春風で寒かろと、仰い姫の身よこたへ春風より
も戀風がぞつと身よゝむ計也、車のかげより櫻丸ぬつと首出しコリヤ女房
我身抓つて人のいたさ、おりやさつきよから死脳が打、早ふ配剤仕おら

ぬかとせり立られてそれ〳〵春風でお寒いとおつゝやる、彈りながらは車を暫しの内の風凌ぎは免有てと姫君を、むりよ抱上押入れば、是ゝ何ゝやる、勿体ないと云つゝも車の内へ入給へば、指心得て櫻丸さらば閉帳とは簾おろす、内よゝ宮のは聲よて、嬉しいぞやとのお詞と神詣のは車で罰が當ろと儘よの睦言聞て夫婦ゝ飛退、女房ども、たまらぬ〳〵、隣嚴しうてひよんな實を設けたと身もだへすれば、これ聞へるわいの、お二人共よは機嫌能嬉しい事でゝごんせんか、イヤもふ餘りは機嫌が能過て近所迄難義がかゝつた、といふ物の有樣ゝそちが働き、よふ尋逢たなてなさんの敎への通り内裏上臈の形よやつし、社家の内へずつといて姫君のお傍へ通り、櫻丸が女房八重でござりまするとヤ上たれば、あなたよも待兼てござつたかして、よふお出やつたもふいてかと、姫衆を待して置て裏道から忍んでお出、其筈〳〵、此中から手繰し

て菅丞相樣の筆法傳授ゑ取籠つてござるを幸、お袋樣へ神參りと願ハせ、お供の衆ゑハ口藥水まく樣ゑ飲して置た、其水で思ひ出した、追付お手洗水がいろぞゑ何云んすやら、あのおぼこなおふたり、甘いやつでハ有、手洗ハ愚お行水が入ゐ云れぬ、そんならつい此川水をマいやコリヤ雨あがりで堤が灣怪我さしてハ晩からおれが不自由な神前の水汲でこい、ソリヤマアどふやら勿体ない大事ない〳〵、王ハ十善神ハ九善、其王樣の弟ハ九善かたし云やいてこいと、せり立られて女房ハ神前さして汲ゑ行、跡ハ氣休め一休みと思ふ所へ三善の清貫、官人仕丁ゑ十手持せ裝束卷上欠來り、ヤア夫ゑおる櫻丸、儕最前齋世の宮を奉幣も濟ぬ中連退たとの風聞、何國へ供したヤアぬかせと、せちがひかゝれが存せぬ〳〵、下として上の事、そつちをとつくとお尋といハせも立ヤアぬかすまい、兼て儕が取持ゑて物くさい事聞て居る、取分今日ハ幡平愈の神いさめ、其場所へ

來て不淨が有と、親王でも東宮でも急度捕へて罪よ行ふ、有樣よぬかさゞゞ引とらへて拷問するそれ、繩かけよと、下知の下ゝつ取卷を身がまへし、知ぬといふたら金輪際ならくの底から天迄ゑらぬ、聊爾召るとかたつぱし、下手のゝ鞠のけて〳〵蹴踏足の擽梅見せふかとぐつと踏出す雨足い顏よ似合ぬ古木也、ヤ下郎めが味をやる、最前から見る所が車の内よ人こそ有、ゐ簾引ちぎり改めよといふよ隨ひ立寄所を、首筋摑んで投退〳〵、車い舍人が預り物、命が有ゞ寄て見よと、かゝるを蹴飛し刎飛し十手もぎ取かたつぱしなぎ立〳〵追て行、其間よ宮と姫君い人よ見られて叶いじと、車の内ゟ飛かり〳〵追若氣の一筋よ、遁れて旅のかり衣何國共なく落給ふ透間を見て清貫が取てかへして車の内、引明見れゞ内い明がら、なむ三寶見ちがへた、舍人めが戻つたら大抵でい有まいと、下道さして逃る跡、間もなく欠くる櫻丸、ゐ二方の見へぬよ恟り、車

を見れば宮の書置、何と見付られて辱めを請ふか立退と有文章よ、ハツト驚き胸に板追付てば供と欠行向ふへ女房八重是お手洗汲できたと見せるを刻退手洗所か、清貫めが車の内詮議せんと來りし故見付られしと二方に何國共無落なされた、そりやア本かと女房に恟りぐにつたり水桶落し、まあこなたにこりやどこへどこ所か、元姫君に菅家のば養子、實母に河内土師の里、菅丞相のば伯母君、先此方へ志ざし跡を慕ひ奉る、汝にこのば車を宮のば所へ引て行、捨置てに後日の咎め成程そふぞやこな樣の、姿よやつして引て行白張と請取て跡案じず共行ぞやんせ、合點と白砂蹴立飛ぶが如くよ欠り行、八重にやがて夫の姿白張肩よ引かけて、車の牛を引直し、させいはうせい精一ぱい、引共遇き牛の足どんくさいと後から、おせば車もくるくと、廻る月日に不成就日か、お二人樣のくろ日か夫の爲よに十方暮、鬼宿車を押かけて、天蔵

天一天上のゐ首尾もよかれ神よしと、祈る心い八專の、くろ日よ間日の斑牛追立てこそ、立歸る、上根と稽古と好と三つの中、好こそ物の上手とい、藝能修行敎への金言公務の暇明暮よ好せ給へる道眞公、堂上堂下いいふよ及ぶゑ、武家町人よ至る迄、風儀をゑたふゐ門人數も限りもなき中よ左中辨平の希世手習稽古ふる兄弟子、今度筆法ゐ傳授い指詰我等よ極りしと、勝手覺へのゐ殿の眞中、朝の夜から、机を直したばこよ茶よと呼立る、聲も届かぬ奥勤女中頭が聞咎め、（調）コレお次よ誰も居やらぬか、希世樣のゐ用が有と呼次局よ不足顔、（調）コレ手の皮がひり付程たゝいても ゑゝら ゑん、合點、顔出しせぬい毎日來るを面倒がり、云合せて鼻明すのか、けふで七日此手習ふれが爲計ゑやないゐ子息の菅秀才い年弱七つ、傳授所へ行ぬよよつて、此希世が傳授して菅秀才の成人以後、身共から又傳授さすれゞ主の奉公も同じ事、ッッポと云て廻る筈、總じてこなたがな

るぬるこい、コレ勝野よふ心得や、そなた衆の不調法、こける所ハ局が迷惑、何おつゑやろとおい〳〵とナヤ希世様、成程そうゑやよい了簡、毎日〳〵氣を詰るも菅原の家の爲、今日も又此清書お目よかけてと指出す、調イヤけふハ赦され、赦せとハなせ〳〵、ハアチ幾度お目よかけましても、丞相様の氣よ入ぬハ、お手の業でハござるまい、取次の仕様の悪さ手かハりよけふハ勝野、イヤ是そふハならぬ、筆法傳授も神道の秘密事、學問所の注連が目よ見へぬか、油こい女子ハやられぬ、昨日迄ハ氣よ入ずと、此清書ハ格別筆先よ肉を持せ、天晴骨髄を書得たれば、傳授いずる〳〵伸切ていてたもれと、頼よ是非なく立て行、調コレ勝野、局の云れたおい〳〵を合點か、ナイ心得ておりまする、調エ、添い、幸傍りよ人もなし福徳の三年め、屏風のかげでついちよこ〳〵と、取手を振切、調エ、いやらしい、無体な事なさるゝと聲立るが合點か、調ヲ、合點ゑや、聲立るがこいい迎、しかけた戀人叶へおれと、

はうどだかへて連て行、アレ〳〵ヤ、ヤとゝ誰ヨヤ、こゝは臺樣や若君樣ヤ〳〵
といふ聲の、もれ聞へてや、曹丞相のゝ臺所、若君のゝ手を引立出給へゞ、
希世ゝ仰天是ゝ〳〵悪い所へよふゝ出と手持不沙汰もへらず口、勝野
ヨ癪の療治を頼まれ、取ヨかゝつて斯の仕合せ、ゝ臺ヨもゝ存のごとく
万能ヨ達せし某、世ヨ希な器用者迚、希世と付たゝ親共が自慢の名、其例
ゝ此若君年よりゝゝ發明、菅秀才と呼給ふも、秀ゝひいづる、才ゝ才智の
才を取て、菅家の公達菅秀才、あら〳〵謂かくのごとし、我等ゝ餘り器用
過、取損ふて按摩の玄だら、ゝ臺所の思し召が、ナ、其言譯ヨ及びませぬ、日
頃の行儀知て居る、そんな疑ひ何のいなと、物ヨ障らぬゝ挨拶、ナ、夫聞て
落付た、今の玄だらの次手ながらお尋ヤ事が有、ゝ息女のかりや姫、齋世
の君とヨやはやした世間の取沙汰、けふで七日相詰る、御所ヨゝ何のさ
たもない虚説かと存れゞ、かりや姫の御殿ゝ明家ゝ詮議もなされぬゝ

親に達も合點の上、欠落でかなどざるかと、問るゝつらさゝに臺所暫し、返事もなかりしが、隱しても隱されぬさがなき人の口の端よ、かゝるも是世なきかりや姫、齋世の君ゝ猶もつて大切なお身の上、互よ忍ぶ戀路の車廻り逢瀬もそこ〳〵よ、事顯ゝれしを恥しく思し召れ、御所へお歸りなされぬ物と有て常のに方ならねば、宮樣附ゝの人〳〵が夫なりけりよゝ去て置まい、又此方の娘の事ゝ希世樣も知ての通り、本の母樣ゝ河內、國、土師村の覺壽樣迚、連合の爲よゝ伯母に樣、菅秀才を設ぬ先乞請て養子娘、此御所へゝ、戻られず伯母樣方へと心付自が內證で尋よ人を遣ゝした、此一落ゝけふが日迄熊父に へ、知しませぬ、夫も何故勅諚よて筆法傳授七日の中、參內止て取籠り世の取沙汰ゝ何よも知ず、傳授も過て聞給ゝゞ嘸や悔り仕給ゝんと、かなたこなたを思ひやる心を推量してたべと案じ給ふぞ理りなる、內玄關の奏者番一間こなたよ畏り、先年

お館より相勤し武部源藏定胤、尋參れとの仰み寄此間所〻方〻吟味致して、漸只今夫婦一玄よより參りたり、是へ通しやさんやと窺へば臺所の方、待兼し源藏夫婦、早〻爰へ參れといへ、コレ菅秀才、源藏より逢間爰より居ても氣が盡ふ、勝野を奥へ連ていて機嫌よふ遊べつ玄やれ、希世樣よも暫しが間、爰より居て邪魔よならば、所がへ仕らんと續いて、奥よぞ入よける、人知ずと思ひ初しが主親の、不興を請る種と成、夫婦が二世の契りも三世のは恩辨へぬ、不義が御所を追出されさむい暮しを素浪人、かは打かれし武部夫婦、けふのお召ても心の優曇花開く襖の内外迄、勝手ても今より忘れねど身の誤りより氣おくれし、膝もわな〻〻窺ひ足、は臺のは座を見るかもハット恐れて飛踏り躓りたる計也、ヤア珍らしい源藏夫婦、連合の氣より背き、此御所を出やつたをかぞへれば、もふ四年、日頃人を捨給ても慈悲深い程きつさもきつい、思ひ切ていいかな事、見返らぬ夫のお心、叶いぬ

事と思ひの外、源藏よ參れと有に用の樣子、何かゝ知らぬが氣づかひな事でゝ有まい定めて吉左右、ヤア自がいふ事計、嘸待兼てござるで有、源藏夫婦が參りしと誰奥へお云ひせヤ云や、ヤア二人共よ顔も上近ふよりや、ヤアテ遠慮よ及ばぬ近ふ〳〵、年月の涙人住居渡世が苦よ成たか昔の面影どこへやら、源藏が着て居やるゝ荒〻敷下〳〵の着物、戸涙ゝ夫よ引かへて、小袖の縫箔遁よ女子の嗜か、二人の中よ子も出來たかと問れて戸涙ゝ有がた涙、冥加至極もないお詞、主人のお目をくらませし罰が當つて苦勞の世渡り、夫婦が着替も一つ賣り二つも三つも朝夕の煙の代よ成果し漸殘せし此小袖ゝに臺樣の下されしに恩を忘れぬ賣殘り、髪の鋏の鼈甲もいつかゝ鑄の引櫛とかゝり果たる、友拵、連合ゝ布子の上、糊立ぬ麻上下もけふ一日の損料借、ア、おはもじ、お上よに存ない事迄、身の耻顯ゝす錆刀、今日迄人手よ渡さぬ武士の冥加、ヤ女房が申上ます通、此

さまよ成さがれば、一入昔の不義放埒、思ひ廻せば主人の罰、悔むよ詮方なき仕合せと、夫婦諸共おろ〳〵涙折から局ハ奥より立出、お學問所へ召ますハ源藏殿只一人には用濟でお手の鳴迄には臺樣よもお出ハならぬとの仰られでござりまず、成程〳〵心得た、源藏ハ局と同道、戸涙ハこちへと入給ふ、只今は前へ召出さるゝ源藏が身の嬉しさこそハさ、局ハ斯と申上たる障子明渡せば、恭しく注連引榮、常よかはりし白木の机、欣然として座し給ふ、凡人ならざるは有樣恐れ敬ふ源藏が、五體の汗ハ布子を通し肩衣絞る計也、やゝ有て仰よハ、去がたき子細有て汝が行衛を尋しよ、住所さだかならず、漸きのふ在家を求め、今の對面滿足せり、其方義ハ幼少ゟ我膝元よ奉公し、天性好たる筆の道、好よ上り習ふよ覺へ、古き弟子共追拔、適手書よなるべしと、思ひの外よ主從の緣迄切て其風体筆取事も忘れつらんと、仰よ猶も恐れ入、は返答申ハ暫りながら、前髪立の

時分よりお傍近ふ召仕はれ、手を書事ハ藝の司、書よ習へとは意なされ、は奉公の間〳〵書慣へたとヤも慮外蚯蚓ののたくつた樣よ書手でも藝ハ身を助るとやら、浪人の業藝鳴瀧村で子供を集め、手習指南仕り今日迄、夫婦が命毛筆先よ助られ、清書の直し字毎日書共上らぬ手跡は尋よ預かる程身の不器用とは勘當、悔むよ詮方なき仕合せと歎くを倩聞し召、子供よ指南致すとハ、賤しからざる世の營み、筆の冥加藝の德、ヤ所よ僞りなくば、手跡もかハらじ改るよ及ばね共、爰よて書せ道眞が所存ハ跡よて云聞さん、認め置たる眞字と假名詩歌を手本よ寫し見よと、白木の机は手づから指寄給へば、ハテはつと先へハ出ず、跡ずさり、志根惡の左中辨物かげかずつと出、コリヤ源藏樣子殘らずあれから立聞、師匠の指圖ハ兎も角も、辭退ヤて出る筈が兩手をついて目をましくし、蟇の所作がらするハ、書ても見樣と思ふ氣か夫ハ飽太叶ハぬ事、ハテお馴染と有て添い、

希世様のお詞よ一つも違ハぬ役よ立ず、併身の分際を顧ぬ、源藏めでもござりませぬ、只今是よて書と有お手本、書て能やら悪いやら、跡先の樣子も存せず、四年以來在所住居、くさ墨よ三文筆、書出しや反古の裏よ書ならぺ場打もせまい、其結構な机よ墨筆、大鷹檀紙の位よ負、一字一點いかな〳〵、ホヽよい了簡、いかぬと知てなせ立ぬ、サアそこでござりまするは勘當の私、は意よあまへた身の願ひ、お取なし頼上まする、夫で聞へた、詞言ハゑてやろが今ハならぬ、といふ其仔細引つまんで咄して聞ふ、此度帝の仰よハ、存命不定の世の中、生死の道よハ老若差別ハなけれ共、ヤア年寄から死るが順道、菅丞相ハ當年五十二、天命を知といふ、齡も過寄年を惜せ給ひ、唐迄響る菅原の一流、是迄傳授の弟子もなし、一代切で絶すハ殘念、手を撰で傳授せいと、勅諚で七日の齋、殊の外お取込事濟でから願ふてやろ、ハア樣子段〻承ハれぺは大慶な勅諚、其勅諚も大慶も知た事

云ず共、早〳〵歸れとせり立る、立な源藏、云付た手本只今書と、仰ゝ武部が身の大慶、希世ゝ偏執む云やく云や腹、立寄る源藏睨付、わりや兄弟子よ遠慮もせず、書ふと思ふて出云やばるか、ホヽ、お笑ひ有ても恥しからず、ほ冤なれと机よかゝり、手本を取て押戴き、心憶せず、摺墨の色も匂ひも薫しき、筆の冥加ぞ有がたき、希世傍へすり寄て、わが樣な横着者ゝ手本の上を透寫し、其手目ゝ身がさせぬ、恥と天窓ゝかき次第、身のざまの恥つらわりや何共思ゝぬかどてらの上よ汚袴、机よ直つて居るざまゝ、貧乏寺の講中奉加塲の帳付よ其儘、無縁法界を書なよと、悪口たらゝ云ちらし、怪我のふりよて机を動し肘よ障つて邪魔するも構ゝず咎めず手本の詩歌、心よく書課せ机も俱よほ前よ直し踏て、頭をさげ居たる、丞相清書を取上給ひ、鑛沙草只三分計、跨樹霞纔半段餘、是ゝ我作れる詩、きのふこそ、年ゝ暮しが春霞、春日の山よ早立よけり、是ゝ又人丸の詠歌

いづれも早春の心を詠叶へり、かなといひ、眞字といひ是よ勝れし筆や有ん、出かしたり〳〵、惣じて筆の傳授といつぱ、永字八法筆格の十六點名をそれ〳〵よいふよ及ばず八〳〵のゑる所、菅原の一流い心を傳る神道口傳、七日も滿る今日只今、神慮よも叶ひし源藏とは慨びい限りなし、有がたや忝い、筆法は傳授有からい、は勘當も赦され前よかいらぬは主人樣、主人とい誰を主人、傳授い傳授勘當い勘當、格別の沙汰なれば、不屈き成汝なれ共、能書なれば捨置れず、私の意趣、い意趣、筆い筆の道を立る、道眞が心の潔白敵聞よ達しても依怙とい思し召れまい、希世よも疑いれな、勘當い前のごとく主でなし家來でなし、此以後對面叶いしと尖きは聲源藏が肝よ燒鉄さしるし心地、道理を分てのは意なれ共傳授い外へ遊ばされ勘當は免と泣わぶる、こりや源藏が歎くが道理、勘當を赦されねば、傳授しても規模がない、彼が願も希世が望も立やうの了

儲い、傳授と勘當かへ〳〵よして遣いされたら、よさそふな物のやうゐ存じまするといふ折から、當番の諸太夫罷出、俄のに用これ有間只今參內遊いされよと、瀧口の官人參られしと申上れバに不審顔、七日の齋過ざる中、に用とい何事隨身仕丁の用意せよと裝束の間ゑ入給ふ、參內と聞し召立出給ふに臺所、襠の下ゑ戸涙を押隱し人目包も餘所ながら、お顏をせめて拜ませんと心づかひい希世が手前、傳授の樣子承いれバ、お前ゑい殘り多からふ、仕合せい源藏去ながら、に勘當い赦ぬげな、館の出入もけふ限りかなたこなたを思ひやり、に參內を見送りがてら、夫れで〳〵と襠の下をゑらするに目づかひ、夫婦い重〳〵お情の身ゑゑみ渡る忝涙、束帶氣高き菅丞相、一間の內より立出給ひ、神道秘文の傳授の一卷源藏ゑ給いりける、當座の面目に流義末世ゑ傳へる寺子屋の敬ひ申奉る因緣斯とぞゑられける、傳授濟からい對面是迄、罷歸れ立よ〳〵

と頻りのは諚、源藏、吼類かいても最叶わぬ、腰が拔て得立ずゞ、引ずり出さんと立寄希世、のふあらけなく仕給ふな、三世の緣の切目じや物、立ぬも理り歎くも道理涙とゞめては暇乞、見奉れとかい取の裙より覗かす戸涙が顏、夫ぞと推し給へ共ゑらず顏よて立出給ふ、何としてかい召れたるは冠の自落るをは手よ請とめ給ひ、物よも障らず脫たるい、ハアはつと計よは氣がゝり、夫い源藏か願ひ叶いず落涙致す、落い落ると讀なれゞ、其驗でかなゝ左よていよも有じ、參內の後知る事、源藏早く歸されよと冠正して、參內有、希世いこい〳〵は見送り、は勘當の身の悲もさい、行よ行れず、延上り見やり、見送るは後ろかげ、は簾よさへられ衝立の邪魔よなるのも天罰と五體を投臥男泣、戸涙が悔みい夫の百倍こなたいは前のお詞かゝり、直よお顏を見さゑやつた、わゑい漸は臺樣の後ろよ隱れてあんゑりと、お顏も拜まぬ女房の心、思ひやつても下されぬ

まんがちな一人泣、同し科でもこなたい仕合せ、女子い罪が深いといふどふした謂でなせ深い、どんな女子よ生れしと、ほ臺のお傍も憚りなく果し、涙ぞいぢらしゝ、希世のさ〳〵立戻り、源藏を歸されぬい、ほ臺所ほ油斷〳〵、一刻も早くぼいまくれと、重ねて仰付られたそこを少し身が了簡、其かいりよい傳授の卷物讀で見る望いない筆の冥加よあやかる爲、ちよと戴してくれんかと、望むよ是非なく懷より、取出すを引たくり逸足出して逃行を、どつこいやらぬと源藏がぼつかけぼつ詰襟がみ摑み、引ずり戻してかづき投、大の男よ一泡ふかせ、傳授の一卷取返し、是を己が引かけふで直垂の羽繕ひ、畫鳶の兀頂め、びく共せゞ打殺すと、刀四五寸拔かくる、源藏聊爾すな、戸涙過さするなとお詞かゝれゞ、ヱ、ヱ儕ヱ、ヱ儕をな、只助るも殘念な、寺子屋が折檻の机い、こいつが貴道具、女房爰へと取より早く背中よ机大げなし、兩手を引ぱる机の足、裝束の紐引

玄ごきがんぢがらみよくゝり付盗ひろいだ師匠の躾、竹箆のかゝり扇の親骨頬よ見せしめひりつかせんと打立〳〵突飛せゞ、痛さも無念も命のかゝり耻を背負て歸りける、源藏夫婦手をつかへ、禁裏の樣子承ゝり歸りたく存ずれ共長居ゝ恐れゝ臺ゝ此上ながら夫婦が事、お捨なされて下さりますな、ヲヽ、夫ゝ心得たが、今行といふを聞捨よ、せめて一夜といゝれもせぬ命が物種緣も盡ずゝ又逢ふ行きやるか、アイ〳〵參りませぬゝ成ませぬでござりますと戸涙が涙長汐よ、かゝく間もなき袖の海、見るめいぢらし夫婦が姿泣〻、ゝ門を出て行、源藏と引違へ歸る梅王青息吐息門の臺木よ足躓きかつぱと轉て起る間も待れぬ〳〵侍衆、ゝ大事が發つてきた、科の樣子ゝ何かゝ玄らず使の廳の官人共、丞相樣を取廻し鉄棒破竹ア〳〵爰へ、ゝ臺ゝへ此樣子をと館の騷動門外よゝ鉄棒打ふり警固の役人、興よも召せ奉らず、菅丞相の前後をかこみ、先よ進むゝ

時平が方人三善の清貫、門外ゑ立はたかり、齋世親王かりや姫、加茂堤ゑり行衛知ず、子細ゐ詮議なされし所、親王を位ゑ即娘を后ゑ立んとする、菅丞相が兼ての工み、其罪遠島ゑ相極り、流罪の場所ゐ追ての沙汰、夫迄ゐ押込置出口〳〵ゑ大貫鋸門の警固ゐ身が家來荒島主税を付置と、呼ゐる聲を聞つらさ、ゐ臺ゐ警固の人目も恥ず走り寄て道真公、そもいか成ゐ事ぞや、齋の間の事姫が身の上ゐ存ない云譯ゐなせなさらぬ科もない身を左迁との仰ゐ聞へぬ恨めしやと歎き給へゞハア愚〳〵、道真慮命蒙れ共、君を恨奉らず漸齡傾きし臣が拙き筆跡迄惜ませ給ふ傳授の勅諚、きのふ迄ゐ敵慮ゑ叶ひ、けふゐ逆鱗蒙る共、皆天命のなす所、先程冠の落たるゐ殿上の札を削られ、無位無官の身と成ゑらせ、今さら悔ゐ愚〳〵、是ゑ配所へ行くゑも有ず、見苦し〳〵歎かれなとゐ臺を、遠ざけ給ひける、希世ゐ道ゑ取てかへし、清貫殿ゐ苦勞千万、此わろの樣子承ゐり、弟

子の方から師匠をあげ向後頼むゝ時平公、菅相丞と一つでない取なし宜しく頼入、氣づかい有れな呑込だ、作法の通り菅相丞、内へ追込門を打、畏つたと荒島主税割竹振上立かゝる、コレ待た其役目希世が替つて仕ると、割竹請取コレ謀叛人殿今迄とゝ當りが違ふ、時平公へ宗旨を替た手見せの働き、割竹一つと振上れゞ、血氣の梅王ずつと寄、希世を四五間突飛す、ヤア下主の慮外物自滅仕たふて出ゑやばつたな、ハレヤレ ゑれて有下主呼ゝり、こなたの口から慮外とゝ膓がよれ返る、其割竹振上て誰を〳〵ヲ、ヲ謀叛人の此わちよを、ヤア謀叛とゝ誰を謀叛ぢ恩を忘れし人非人、菅丞相よゝお搆ひなく儕よ罰ゝ身が當ると又飛かゝる梅王丸ぢ手を指延引寄給ひ、ヤア小ざかしい汝が擧動勅諚よ寄て斯成道眞、希世ゝ扨置其外へも手向ひするゝ上への恐れ、汝ゝ勿論館の者共我詞を用ひずゞ、七生迄の勘當ぞと、聞て希世が剛げも拔、コリヤ梅王、ゑて見ぬかい、顯げた計の腕な

しめと、のさばる無念忍へる梅王、是非も情も荒嶋主税、官人原よ退立られ、すご〳〵館よ入給ふに有様こそ勞ゝしき、サア〳〵用意の大貫錦表と裏へ手分の人數築地の穴門麺の口迄、暫時の間よ打付しゝ物忌ゝしく見へよけり、清貫見廻しゝ能氣味、出口〳〵の締りも能いか、築地の屋根を越ふも知ぬ、主税萬端油斷すな、暮よ及べば希世殿いざ歸らんと打連て六七間も打過る、築地の、かげよ待居たる武部源藏ぬつと出、希世を一當悶絶させ、周章清貫相伴投、スハ狼藉者打のめせ殺せくゝれとひしめいたり、武部ゝ戸浪よ指添渡し寄ゝ切んづ勢ひ也、希世ゝ漸〳〵人心地立上つてサアうぬゝ源藏め、一度ならず二度ならずひどいめよ合したな、うぬがする狼藉菅丞相がさしたよ成て、流罪の仕置が死罪よなろと、云せも果ず高笑ひ女房ハレ聞、物覺のない拔作殿傳授ゝ請ても勘當赦ぬ、此源藏よゝ主人がない、梅王ゝ主持で儕めをさいなまず、こらへて居るかゝいさよ

名代は投てこました、名代次手は皆撫切と、女房諸共拔放しめつたなぐりの太刀風は、小糠侍鋸屑公家吹立られて散失けり、敵なければ立歸る時節も幸黃昏時、門の扉をとん〳〵、扣けば內方答める聲、聞覺へた梅王か、さいふい武部源藏殿か、殿所かい若い者油斷去て居る所でない、扉の釘付踏破り、此主人達の此供し此塲を退い安けれどふとが今も聞通り仁義を守る道眞公、と有て讒者が計ひよて、ふ家の斷絶覺束なし、此幼少の此若君夫婦が預り奉らん、所存を立るい　コレ梅王、若君をつそりと、築地の上から、できた〳〵　源藏殿、ふ上へ云てい、得心有まい盜出すがふ家の爲、そふ云や〳〵　能了簡、一刻一步も早退たこゝ、賴む〳〵と云間もなく築地の上から梅王が心の早咲、勝色見せたる花の顏ばせ、大事の若君怪我さしますまい、心得高き築地の屋根延、上つても届かぬ背たけ、とやせん戸涙を抱上れば、軒は手届く心もとゞく若君請取抱ふろし、外と

内とよ忠臣二人胸ゝ開けどひらかぬは門、荒島主税目早く見付、盗人の隙ゝ有と守人の隙がない、宵覗きめを手引する内と外との相盗めら、菅秀才を盗んだ此旨、注進せんとかけ出す先よ源蔵が、立ふさがつてどこへ〳〵、儕をやつてよい物かと、討てかゝれゞ拔合せ切結び切ほどき、追つかへしつ二人が勝負、屋根の上から見て居る梅王、棧敷正面眞向二つ、破て命ゝ荒島主税、とゞめよ反ゞぬ切捨〳〵、危い場所を盗人夫婦、行末、榮ゆる菅秀才、若君頼夫婦の衆、舘の父君母君を頼むぞ梅王心得たと、互よ頼み頼まるゝ、忠義〳〵を書傳ゆる筆の傳授ゝ寺子屋が一藝、一能名も高き人の、手本と成よけり

○第二　道行詞の甘替

〳〵子供衆買たり〳〵、飴の鳥ゑや飴の鳥、夫がいやならゑる飴鑿切泣子の口へゝ地黄煎玉、扨其外平野飴桂の里よゝ桂飴西の宮よゝ飴の金

其品〻ゝに往て買たり、拙者が自慢で賣弘ろめる、櫻飴を買つしやい櫻飴〻、櫻〻と、己が名を、いへ共包む頬かぶり、木綿頭巾よ袖なしの、羽織に輕き身なれ共、忠義に重き牛飼の櫻丸にいつぞやより、加茂の川涙立出し齋世の宮と姫君よ漸〻と廻り逢、一日ふた日に我家よも、忍ぶよ何と菅原の、伯母君頼み參らせんと、行く車の俱ならで跡と、先とよ打荷ふ飴の荷箱のかた〻よ、ほ二方を入參らせ浮世を土師の里へとて、飴のとり〻賣て行、こゝろ、づかひぞせつなけれ、都をば夜を深、草よ、出ても道にあやなくて、ほ香の宮よ明渡る、道を芹川淀も越へ、町を過れば爰ぞよし、誰かに何と石清水〻〻お出と荷をおろし、箱をひらけばうづ高き姿あらにようかりや姫、暫らく拜む日のかげよ、目なれぬ山やゑらぬ里、思ひなくてぞ見まほしゝ、なふ宮樣と有ければ、さればとよ、そなたの父菅丞相いかなる事の誤りよや、押籠の身と成けるも我〻出し跡なる故、正しく

ゝ去られ共、やがて赦され有ぬへし、兎ゝも角ゝも我が身ゝ今賣飴の如くゝて、傘ゝ覆へる日かげの身、いつかとけなん心ぞと、仰ゝ櫻丸、左樣ゝてゝいゝずに忍びましまずも、飴をゞ上ゝ君を下、取も直さずあめが下ゝろしめす瑞相ゝてゝいと、ゞ上るゝ宮ゝ猶勿体なしと身をすべる野路の畔道、そろ〳〵と、蕨が裾ゝ手を入れて、裾ひるがへす、裏撫樣とめ木に草も芳しき、春の野面ゝ群る蝶、袖ゝとまらゞ、羽摺て鏡絶せしけゝひせん、爰ゝ我名をかりやの里、今苗代の時を得て、民の手業も遠目ゝゝ、いとめづらかゝ、引鶴の聲ゝ千歳もかゝらじと、契りし今の閨の内宵より去めてゝぬる夜さゝ、月ゝ出るやら曇るやら、枕とる手ゝ、寐て解帶の、いかゝゝぬ世話〳〵、枕とる手ゝ、寐てとく帶の、いかゝゝぬ世話〳〵、結ゞぬ夢を覺せとや、春の風、ゝぬるみし空の快く、行手の森の八音ゝ、見付られじと手ゞしかく、又忍ばする飴賣が、片手ゝ太鼓片手ゝ撥、聲おかしくも拍子ど

り、こんりや〳〵〳〵、是れ天子の始めなされた神武飴迚、神武天皇れ飴がお好でねらえやりましたる名物飴をゞこちも仕なろて嗅等や嶺等が、もみの襷袴をえんどろもんどろかけて、えんどろり、もんどろりとねりやりましたを買なら今えや〳〵と賣聲の、小供あつめよ子の親が、袖のみやげを買よ來て認める間の取沙汰よ、惜や都の菅丞相筑紫へ流され給ふ故、津の國安井よ風待しておいしまするれいたれしと所縁とえらず告て行、跡の驚き、悲しみれ箱を細目よ顔計、何道眞れ左迂とや、父上安井よましますとや、せめてお顔が拜たい、どふぞお船の出ぬ先よ、逢せてたも櫻丸、頼〳〵もえどろよてわつと計よ泣給ふ聲をも人よ、えらせじと喇叭の笛よ紛らして、夫が道を横切よ、一荷の涙擔ひ行、先れ何國ぞ津の國の安井の岸の安からぬ思ひ重ぬる、哀れさよ、世よつれて海の面も風さへぐ、湊よ船とゞめしれ、菅原の道眞公、終よれ讒者の舌強く

覺へなき身よ罪極り、筑紫宰府へ流罪の籠船津の國安井よ着しかゞ警固の武士い法皇の舊臣院の廳判官代輝國、逢坂增井よ陳幕打せ見るめ嚴敷鎗長刀、數多の官人四方を圍ひ出船を松の下かげよ日和見合せ居たりける、判官代輝國海の面を見渡し幕絞らせて丞相のおいします、籠輿の本よ手をつかへ、沖の樣子を窺ふ所よ、五三日もに出船の日和共相見へゆさず、此所よに逗留有ふより、河内の國土師の里へお越有て、伯母君覺壽公共に暇乞ひへかしと、ゆ上れゞ菅丞相おもやつれたるに顏ばせ、物見より顯いし給ひ、院の御所よ使いるれゞ、上を學ぶ下〳〵迄情有武士よ、斯囚と成し身を、赦し送らゞ我よりも、おとが罪いいかよせん、思ひ寄ずとの給へゞ、有がたきに仁心、左程尊きに方のお爲よ成て咎めよわいゝ死後の面目子孫の譽れ、殊よ私わざならず法皇兼ての仰よい、土師の里よ伯母有と聞及ぶ、若津の國よて沙待の隙わらゞ、暇乞させよ

と密ゝのに仰何彈る事もなしに心置なく土師の里へに出と、すゝめヤせゞ菅丞相、都の方を打ながめさせ給ひ、世ゝ有がたき法皇のに心や、天子ゝ父母なしといへ共現在のに父君、其に力ゝ及ばずして斯囚と成事ゝ、いか成罪の報ぞや、はかなの浮世や淺ましの身の果やと、三世を悟るに身ゝも、世をつらしとのに述懷哀れゝも又いたゝしゝ、日和見の船頭罷出、今朝の天氣合まだ二三日もに逗留と存せしゝ、思ひの外立直り風治りしへゞに出船のに用意といふより輝國ヤアだまりおろ、立直るまじき日和立直つたとぬかすからゝ、よき日和の悪しく成も儕が眼ゝかゝるまい、イヱく左樣ぞやにぎりませぬ、二八月ゝ船頭の俚時、得手ゝ手の裏かへします、ソレまだぬかす、左樣な手の裏かへす日和ゝ、大切な流人の船出さるゝ物か、イヱサ是ゝ慥ゝ、ヤア狼狽者向ふ山ゝ雲がかゝつてまだ四五日もに出船の日和ゝない、いらざる儕が奉公ぶりと、呵り付れゞ悔りしい

かな功者な船頭でも、此暴風よりの仕様がないとつぶやき〳〵入よける、菅丞相の輝國が志法皇の、に心の有がたさよ、河内の國へ廻んと、仰豐よ安〳〵とに興とゞまる所迚、井の字を居と書かへて、安居の宮と末の世よ仰も神の威德かや、かゝる折から櫻丸宮姫君をに供ゞ、先よ進んで馳來り、菅丞相に流罪と承りり、緣類の者暇乞の願、又一つよりの科の樣子も承りたし、に役人へ直談と立寄を餘多の官人ヤア直談とり慮外者暇乞とり無法者油斷ならずと取卷を、夫と悟りて輝國、ヤレ聊爾すなと押えづめ、科の樣子聞たくばいふて聞さふ、上より咎めの條〳〵具よ云開き給へ共、齋世の宮とかりや、姫密通の云譯、に存じなき迚あかり立ず是非なく科よ落給ふと、聞て悲しくかりや姫宮諸共よかけ出給ひ、何我〳〵故因れとや、情なや淺ましや不義り二人が誤りぞ、流しなり共切成共罪よ行ひ丞相を助得させよ、父上よ逢せてたべ助てたべ對面させよと二方り泣さ

けび給ふよそ、輝國遙よ頭をさげ、恐ながらに對面有てい彌丞相の罪重く成道理、元此おこりい去頃、君天子よ成かいりに姿を唐僧よ寫させしい菅丞相の計ひ唐土迄天子と思いせ我娘を后よ立外戚とならん下工と、議者の舌よかゝる內宮姫を連に出奔、彌それと敵聞よ達し罪なくして罪よ沉む、殊よ姫君とい親子の中是天子への恐れ有ぱよもや對面いまじ、兎角此上菅丞相の爲を思召ぱ、是よりかりや姫とに緣を切れ、二度禁庭へお歸り有て、謀叛なき趣きを仰わけられ、丞相歸洛をに願ひいへかしと、ア上れぱ齋世の宮、我故罪よ沉むも悲し、又我をのみ戀慕ひ付添來たる契りをぱ、見捨て何といなれうぞとかこち給へぱ姫い猶更父の爲よい怨敵我を罪してに流罪を、赦してたべ人ゝと伏沉み〳〵。消入計よ泣給へぱ、媒したる身よ取て、つらさ苦しさ櫻丸、骨よも身よもこみ渡り思へぱ〳〵我なくぱ此戀誰か取持ん、科人い外ならずと悔めど今更

詮方も、涙先立ばかりよてとかふ、詞もなかりしが、立直つて宮のお傍よ恐れ入、私元ハ土百姓の世悴ハ扶持を下され君の舍人を勤るも皆菅丞相樣のおかげ、其恩有方を流罪させのめ〳〵見てハ居られず、と申てから我〻風情の及ばぬ所、輝國殿の仰のごとく、是より姫君とハ緣をお切なされ、他人と成てお願ひ有ばよるや叶ハぬ事もござりますまい、再び丞相樣ハ歸洛有て後、表向のハ緣結び、暫しの間のお別れハ聞入下されよと、身よかゝつたるせつなさよ、土よひれ臥願ふよゞ、齋世の宮ハ猶涙、一旦館を出し身の面恥かし二度の恥と、仰よ輝國詞をかへしハ館へこそお歸りなく共、法皇のハ所へお越あらば猶以てハ願ひの能便り、ひらよ是非よと勸むるよゞ、兎角涙よくれながら姫君よ指向ひ、我戀草の思ひよ迷ひ、丞相の歸洛を願ハゞ天道怒り給ふべし、契りハ盡ずかハらぬ共親の爲と諦めて、別れてたもかりや姫と涙と俱よ宣へば、勿体な

い、お歎きをかけるも元ゝ自ゆへ、いつそ、こがれて死だらゞ今の思ひゝ有まいよ、お名殘惜やとゞ顔を、見るも涙見らるゝも涙、かた手よ、又逢迄ゝ隨分まめで、おまへ樣よもゞ機嫌でと、跡ゝ涙のすがり泣、わつと絶入給ひける、かゝる、折節、いづれ共えらぬ女中の乘物つらせ、おめず憶せず判官代よ指向ひ、私事ゝ土師の里立田と申て、菅丞相の伯父の娘と、聞よ嬉しきかりや姫、コレ姉樣イヲ立田樣かいのと、取付給ふを突退刎退、母の覺壽左迁の樣子を聞及び、年寄ての悲しみゞ推量下さりませと、いふ内よ又姫ゝ取付、其お歎きが身よ取て猶悲しいと、歎くをふり切、何卒此所の沙待を土師の里よてゞ一宿あらゞ、心よく暇乞も致し度願ひ、あすをもえらぬ老の身の、少しゝ歎きもとゞめたく、無體なゞ訴訟、夫宿禰太郎が參る筈なれ共、郡役も勤る身で身勝手な事申もいかゞ、女の慮外ゝ常の事と不調法も顧ず、お願ひよ參りし、お役人のゞ了簡偏よ頼み上ますと、

願へゞ輝國、一家の願ひ叶ハぬ事、太切な囚人涙打際の一宿心元なく、只今用心の爲土師の里へ立越る、一宿ハ覺壽の元と聞て嬉しく、ヤ、夫ハヤ結構なに用心と、悦びいさむ立田が袖姫ハひかへて、コレヤ、迚もの事ゑ父上ゑお目ゑかゝるお願ひと、頼む袂をふり放し、恐れ多い、丞相樣へどの顔さげて逢ふと思し召ぞ元あなたゑ菅秀才といふお子のない先、母樣がお前をゞ蘇の上より遣ハされ、私が爲ゑ妹でも今ハ菅原の姫君樣、勿体ない宮樣へ戀仕かけて今此大事ゑなつたでないか、戀ハ心の外でもな、是ハあんまり外過て姉のわし迄人〳〵へ顔が出されぬ、耻かしと呵る心も曹輩の道よしみと知れける、輿の内ゑハ菅丞相態と詞をかけ給ハ、ヤ、事を量るハ判官代、ヤア立田殿今更に異見益なき事、コリヤやい櫻丸何をうつかり、一時も早く宮を法皇の御所へに供ヤせ立田殿ハかりや姫をに同道ハ必無用ナ合點か、コレサ土師の里の親元へ、急度お預けなされよと

表を立て、心い情、立田が持せし乘物へ菅丞相を召かへさせ跡と、先とい警固でかためは乘物いゆるやかよ、常の旅行同然よ輝國が引添て土師の里へと急ぎ行、是父上、丞相と宮諸共よ欠行給ふを櫻丸が引とゞめ、立田が押へて引わくる名殘盡せぬ妹背の別れ、ふふきの別れと追又、姉が情で引合す、いとど思ひい增井の濱目い泣、風らす赤井の水、いつか安居と逢坂の水、の哀れや、泣別れ、さらぺ、さらばと、聲殘る菅丞相のは別れ對面有たき覺壽の願ひ、流人預かる判官代輝國の用捨を以て、河内の屋敷へ入給へば、老の悦び大かたならず馳走の役人夜晝の、わかちも玄らぬ鬧しさ、立田の前い船場よて思い寸逢たるかりや姫、密よ伴ひ歸れ共、家來も多くい玄らぬかち、隱し置たる小座敷の襖をそつと押ひらき、嘸淋しからふ精も盡ふ顏見よきたいい山ふなれど、去迚い何や角や用事の多さ、母樣の傍放されねぺ得參らぬ、今が能透誰も來ぬ氣晴しよ爰

べと、心づかひも曹輩の姉の情をかりや姫、一間を出る目い涙、齋世様ゑ別れてより段〻お世話ゑ預かる上、父上様ゑもお目にかゝりせめて不孝の亍譯、夫も叶いぬ物ならべと、我身の覺悟極めても、產の母ゐ覺壽様、今の母ゐ都の弟親王様のゐ事い、猶しも忘れぬ得忘れぬ心を推量してたべと歎けべ、倶ゑ涙ぐみ悲しいい道理〳〵、去ながら丞相様ゑ逢ぬ迚、短氣な事などかんまへて思ひ出しても下さんすな、母ゐのお願ひ立て此屋敷ゑゐ逗留、どふぞ首尾を見繕ひ母ゐのお耳へ入、お指圖請てと餘所ながら、口むしりかけて見たれべな、こちの思ふた坪へいいかず母ゐの堅くろしさお果なされた郡領様ゑ少しもかいらぬ行義作法、我產だ子でも人ゑやれべ、先こそ親なれこちい他人、それを親ゑやの娘ゑやと、思ふい町人百姓の譯をべ知ぬ子ゑわまさと、幸先惡い訴訟もならず外の事ゑ云紛らし其場い濟でも始終が濟ぬ、お宿亍すもけふで三日、時氣

空も吹晴て、下り日和よ已つたと船場から注進故、今宵八つがお立迎、輝國殿の旅宿より云らせよ寄てお立の用意今やなんと〻思ひの外手間よ成たがどふしてよかろふ、膝共談合、コレ泣ずと、よい智恵出して下さんせとつつ置つの胸算用、後ろよすつくと宿禰太郎、よい分別者是よ有、ヤア太郎様いつの間よ、〻いつの間よとい、コレ立田、連添男の目をぬいてこつそりと取込で、だいそれた身の上咄し、かりや姫いそなたが妹蕨の上から養子の子細、知てい居れど京と河内、武家と公家とい位も格別、曾丞相の伯母風吹し、聟めかしてもいつかなめかれぬ位負名計聞て逢たい今てんとは器量、齋世とやら様とやらが現様よならゑやつたも道理ゑや〳〵、姫の顔見ぬ先いおれば楊貴妃ゑやと思ふたが、競べて見れば無楊貴妃、そなたの名もかへねばならぬ、ソリヤ又何とへ、〻ゑれたお次の前、エ、ずい〳〵と出はふだい、母屋へも隱してゐる、此譯何共云ゑやんすな、そ

れい氣遣仕給ふべからず、明日のお立ゑらされし輝國の旅宿へ參り、此間は逗留心づかひの一禮ヤし、いよ〳〵刻限相違なく一番鷄の鳴のが相圖、ヤし合せよいてこいと覺壽の云付け、只今參る道でよい思案が出たら、コレ戻つていかふお次の前、アレまだゑやら〳〵轉業ロ、ラット閉口いてこふと表の方へ出て行、跡を見やりてかりや姫、あなたがお前のお連合身の上の事よ取紛れ、は挨拶を得ヤさぬ、アヽ、これ挨拶ういつでも成事、こちの願ひい延されぬ、ヤくどふがなと案じ煩ひ、それ〳〵、所詮母様よいふた迎埒の明ぬいゑれて有、連合も留主、母様もお傍よ、ござらぬおりからなれば、お前を私が連ていて、呵られふがどふならふが跡い儘いな、サアこなたへと姫の手を取後ろより、不孝者どつちへ行と、襖ぐいらりと母の覺壽杖ふり上飛かゝるを、立田いとつと抱とめ、お前よ明ていいなんだ隠したお腹が立ならば此立田、打も擲きをなされませ、此中も宣いぬか、

人よやれゞ我子でないとおつゝやつての折檻ゝ、母ゐ共覺へませぬ、丞相樣のゐ秘藏姫、杖棒あてゝよいものか、サア自を〳〵と姫よかゝつて身を厭ゝす、イヤ　お前よ科ゝない不孝な自打給へと、立田を押やる杖の下いや〳〵　お前ゝ打されぬイヤ　こな樣ゝと折檻の杖を爭ふおとゞい思ひ、老母ゝ猶も怒の顏色、コリヤ立田おゐや他人よゝ折檻せぬ、養子よやつた丞相殿ゝおれが爲よゝ甥の殿、子よやつた姫ゝ甥孫、親も赦さぬ徒ゝて、大事の〳〵　甥の殿流され給ふゝ誰が業憎ふて〳〵　コレ此杖折る程擲ねゞ丞相殿へ云譯立ぬ、六十よ餘つて白髮天窓、連合よ別れた時剃をそらさぬ立田の前、尼よ成てゝ便りがない、力がないと、留られて法名計覺壽と呼れ、邪魔よ思ふた此白髮けふといふけふ役よ立田、天窓を剃て衣を着れゞ打擲の杖ゝ持れぬゝい、傍杖望む立田からと走り寄て丁〳〵、打るゝ姉妹打母も俱よ、涙の荒折檻、ア、これ〳〵　伯母ゐ前卒爾の折檻仕給

ふな、齋世の君のに不便有娘よ疵ばし付給ふな父を床しと慕ひくるかりや姫よ對面せん、是へ伴ひ給へれと障子の内ゟ丞相の、に聲高く聞ゆるよぞ、老母へ杖をからりと投捨、わつと叫んで臥轉び暫し、答へもなかりしが、産の親の打擲へ養ひ親へ立る義理養親の慈悲心へ産の親へ、立る義理、あまき詞も打擲も、子よ迷ふたる親心、逢てやろとへ姫よりも母が悦び詞よへ云盡されぬ、かりや姫、結構な親持た、持た〳〵と目よ持た涙の限り聲限り二人の娘へ何事もお慈悲〳〵と計よて泣より外の事ぞなき、コレのふ爰から禮をいへふより、こいと有ぺいざ傍へと、隔の襖押明れぺ菅丞相へ見へ給へす、逗留の中作られし主の姿の木像斗、そもいかよとかりや姫逢てやらふと宣ひしへ母ゟの折檻をとゞめん爲、兎よ角不孝な自故お逢なされて下されぬか、今物をおつゑやつたへ父上よ違ひないよ、木で作りし父上樣が但しへ物を宣ひしか、又へ何所ゑ

べ隠れてかと、立て見居て見うろ〳〵、のふ騒がしやかりや姫、丞相の逗留中は馳走ヤすゝ奥座敷へゝ餘程間數も隔たり、先程聲のかゝつた時爰へゝどふしてござつたと思ひながら、嬉しさよ辨へなく見れば此木像計、次手ながらかりや姫咄して聞さふ、逗留の中よ主の像、畫て成共作てなりと、伯母が筐よ下されと願ふた日から取かゝり、初手よ出來たゝ打破捨二度目よ作り立られしを、同じく是も打碎き、三度目よ此木像作り上ておつゝやるよゝ、前の二つゝ形ばかり、勢魂もなき木偶人。是ゝ又丞相が、魂殘す筐迚下されし主の姿、物をいふまい共いゝれず、帝への恐れ有ば、逢たふても逢れぬ親子、木とな思ひそかりや姫、物おつゝやつた父上よ逢つて嘸嬉しかろ母も本望遂ましたと親子三人悦びの、中へのさ〳〵立歸る太郎が爺、親土師の兵衛、覺壽是よおゝするか、お客人のお立る明朝出立の拵へ嘸取迄、役よ立ずとお見廻ヤし手傳ひでも

仕らふと、參りがけよ輝國殿の旅宿へもちよと付屆躬が幸おり合せ、用意も大かた出來たと聞先ん大慶、兎角する內もふ暮相、一まづ歸つておる立の時分又參るのも老足なれど、お邪魔ながら是よおろ、心づかひ成下されな、兵衛殿の義理〳〵しい、嫁子の所ん內同然斷よ及ぶ事か、用が有べ遠慮なくおつゑやつたがよいわいの刻限迄ん コレ立田、そなたの部屋よお寐間をとりや、後程お目よかゝらんと姫を連立入給へべ、跡ん親子が小聲よなり、コリヤ道〳〵ゑめし合した通り太郎ぬかるな、氣遣なさるな親人と、奥と部屋とへ別れ行座敷〳〵ん燭臺てらし、今宵限りのぢ奔走とり〳〵さんぐ、計りなり、土師の兵衛ん一間ゑそつと拔出前栽の、勝手覺へし切戸口錠捻切て押ひらけべ外から相圖の狹箱指出す中間徒若黨、コリヤやい云付た人數の裝束、丞相を迎ひのはり輿、といふ時間よ合せと、家來共先へ歸し狹箱引だかへ、月かげもるゝ木の間〳〵うそ〳〵

同腹中親人お首尾ゝ、件の物ゝ參りしか、躰氣づかい仕るな、コリヤ此中ゝ計略の彼一物、大事の談合爰へ〳〵と大庭の池の邊りで呵く親子、宵からそぶりゝ氣を付て、宿禰太郎ゝ目放しせず、立田の前が物かげより聞共ゑらず宿禰太郎、先程お聞なさるゝ通り、判官代輝國、迎ひゝ參るゝ八つの上刻、時平公ゝお頼みの、曾丞相殺す工面、贋物仕立迎ひと僞り、請取て途中でぐつ、とゝいふ物の、一番鷄のうたゝねゞ、姑の片意地名殘惜んで渡されまい、八つ鷄の啼ぬ先ゝ宵啼する鷄是ゝ有かと狹箱より取出し、皮膚のよい白相國、とかふする内もふ夜半一調子はり上げ存分ゝうたふてくれ、一聲聞ねゞ落付ぬ、親人なぜ鳴ませぬの、イヤ其分でゝ鳴ぬ筈、宵鳴ゝ天然自然極めてゝ鳴ぬ物、夫を鳴すが秘密事、大竹の中へ熱湯を入、其上ゝとまらすれゞ、陽氣の廻るを時節と心得時をつくる、とまり竹も狹箱ゝ入て來た、臺子の湯もたぎつてゐろ、釜ぐちそつと取てこい、

取てくるは安い事、湯を仕かけても鳴ぬ時は、くど〳〵、鳴ぬ時ハ又分別と親子が工み、なむ三寶一大事、先へ廻つて母御へおゝらせヤてイヤそふしてハイいいでハ又こちらが、いふてハあちらがこちらがと、心迷ひし胸撫おろし直禰様、太郎様ハ何國よと、尋る聲よはつと二人が廢忘けでん、鷄隱す狹箱、あたふたゝめてさあらぬ風情、イヤ事〳〵ゝう呼立るハ、何ぞ急な用でも有か、さもない事なら不遠慮千万、親人も此直禰も、肝よこたへて悔りしたと、いふ顏つれ〳〵打眺め、お前方の悔りよりわしよ悔りさゝゝやんした聞へね連合鼻君、贋迎ひを拵へて菅丞相様殺さふとハ、あなたよ何ぞ恨みが有か、但しハ時平よ頼れし欲よハ馴染の女房も捨、母御の義理も思ハずか、お前ハ捨る心でもわゝや、得捨ぬ太郎様、コレヤ親父様思ひとまつて下さりませと、鼻を拜み夫を拜み、聲も得立ぬ貞女の思ひ涙、操を顯ハせり、兵衛ハ直禰よ眴せし、はゝや眞身の意見よ

逢て親も躰も面目ない、向後心改る、嫁女此事聞流しよ、、勿体ない、聞流さいでよいものか、ほ得心と有からい、此世ばかりか未來迄かいらぬ夫婦鼻君、まだ如月の餘寒も烈し、巨燵よ膚温め酒、一つ上たいッかお出と、先よ立田がそれそこを、心得太郎が後袈裟肩先四五寸切れながら、振返つて摑み付、是人でなし、臭怯者、一人の手よも足ぬ者、欺し殺しが本望か、女の義理を立過し悔しや無念と罵る聲、おどぼね立なと直禰が下着、襠先口へ押込捻ふせ肝先ぐつと、一ゑぐり、兵衛い、前後よ心を配り、躰息い絶たか、氣遣ひめすな只今とゞめ、扨此死骸い、問よ及ぱぬ此大池體を浮さぬ手ごろの石袂や帶よくゝり添深みへやれと二人ゑて投込死骸い紅の、血汐よ染る池迄も立田が名をや流すらん、親人「是い是でも濟ぬい鷄臺子の湯を取て參らふ、太郎夫よい及ぱぬ、鳴す仕やうい身共よ任せと、武士の嗜む懐中松明手ばしかく燃し立、池の中へ明りを見せ、狹箱

の蓋仰向鷄を上ゑ乗浮める池の水の面刀の鐺指延す腕一ぱいに押やれぺ動かぬ水も夜嵐ゑ立や小溟の容裔ゑつれ半端計流れ行、親人何をなさるゝ事、狹箱の蓋を船ゑして、子供のする業おとなげない、あれが何の役ゑ立ゝ、譯を知ずゐ云ふて聞ふ、惣別淵川へ沉んで去れぬ死骸ゐ、鷄を船ゑ乗て尋れぺ、其死骸の有所で時を作る、鷄の一德思ひ出し、池へ沉めた立田が死骸、今一役ゑ立て見るうまい手番、拍子まんが直つて來たあれ〳〵太郎羽たゝきするゐ死骸の上か、そりやこそ鳴いたゐ東天紅ソリヤ又うたふいとんてんかう、八つゑもならぬ宵鳴の聲さへかへる春の夜や、庭木の塒ゑ羽たゝきして一鷄鳴ぺ万鷄うたふ、函谷關の關の戸も開く心地ゑ、親子が悦び是から急ぐゐ菅丞相、迎ひの捨へ氣がせくと、兵衛ゐ出て行切戸口、直禰太郎ゐ工みの仕殘しをめを聞して入ゑけり、早刻限ぞと膳の捨へ銚子土器熨斗昆布姐共ゑ嶋臺持せ、伯母は座敷

へ出給ひ、百日千夜留たり共、別るゝ時いかいらぬつらさ、此上頼むいは、兎の勅諚、歸路を松の此嶋臺行末祝ふ熨斗昆布、菅丞相も此間心づかひのは一禮互よ盡ぬは名殘、直禰太郎罷出、は立の刻限迚早門前迄迎ひの官人判官代輝國い路次の用心辻固め、只今旅宿を立ヤされ、輿舁の官人よ譜代の家來を相添られ、只今是へ參上と怪しの張輿舁入れて、時刻移るとせり立る、菅丞相い悠〻と大廣間より出させ給ひ、輿よ召す迄見送る老母、人前作つてよこ〳〵と、泣ぬ別れぞ哀れなる、直禰太郎もは見立門送りして立歸り、ヤレ嬉しや仕廻が付た、覺壽樣もお氣休め、寐間へござつてイヤ寐たふてもねられぬわいの、ねられぬといは氣色でもアレまだいの、客を立て嬉しいと、一ト道な聞殿の悦び、一つ屋敷よ居、ながらの暇乞も得せいでの、かりや姫が悲しかろ、人の逢のもけなりかろと、かけ搆いぬ笠田さへそれで態呼出さなんだが、機嫌よふ立去やつたを悦びよいな

せこぬぞ、誰ぞいて見てこいと、云よきよろ付直禰太郎、姫どもゝ立戻り、奥よりござるゝかりや姫只お一人、立田泡ゝござりませぬ、何ぞやいぬ、内を放れてどこへいきやろ今一度見てこい座敷の隅ゝかくれ〳〵、尋ゝと吟味の厳しさ挑燈手で、ゝ若黨、中間幾人有ても行屈かぬ、花壇築山手分して尋る奥の池のはた、芝ゝ滑つた生血を見付け〳〵此血の流れ込む、池を捜せと聲ゝ、水心得た奴共飛込〳〵水底より、かつぎ上たる立田が死骸、驚き騒ぐ家内の騒動、太郎ゝ鼻も動かさず、殺したやつゝ内ゝあろ詮議濟迄門打て家來共動かすなと、わめきちらせバ母覺壽姫もかしてへ轉び出、誰人の所爲ぞや、先からお顔を見なんだゝ、伯母泡のお傍ゝと思ひ設ぬ此死骸、父上ゝ生別れお前ゝ死別れ、時もかゝらず日もかゝらず悲しさつらさ一時ゝ、かゝる例も有事かと老母ゝ取付、悔泣、道理〳〵、そなたゝおれが傍ゝと思ひ、おれゝそなたが傍ゝ居ると

思ひ違ひが娘が不運、母が因果でお宏やるいとかつぱと伏て正體なし。太郎傍へ立寄て、涙が死人の爲よいならぬ、女房共への追善よい殺したやつをひつぱり切、是よて詮議仕らんと樣端よ大わぐら、男女よ限らず家來のやつぱら片端から詮議する、ヤアとつ付よふる宅内め、身が前へ出あがらふ、ナイ〳〵ないとは前よかつつくばい、人い云らず拙者めよお疑ひいでざない筈、お死骸を取下た、は褒美を下されうで一番よお呼出し、忝い義でごいりまするでごいります、ヤアまが〳〵しい褒美とい横着者め、立田が死骸池よ有を儲いどふして云りおつた、夫ぬかせ、イヤあの尻もあたま天窓も見やう筈いごいりませぬ、池の深みへ芝から傳ふた血を證據よキアぬかすな、挑燈の灯明りで、それがそれと云れる物かうぬが殺して沈めた池、外の者がどふして云らふ、血の分でい云譯立ぬ、是いお旦那無理おつ云やる、云譯立ふが立まいが、池が血へ流れ込だ其外い存ませぬヤア

泡が血へ流れたとゝ、血迷ふて何はざく、きやつ詮議場で水くらゝせ、白狀さするそれ引立と、直禰も續いて立所を老母押とめ、詞せめるゑ及ば ぬ詞の展轉、嬉しや娘の敵が去れた、ハアせめなとゝ天晴お目高、科極つた罪人、女共へ手向る成敗大げさゑ打放す、腕を左右へ引ぱれと刀引さげ立寄直禰、是成敗ゝ常の科人、けさゑ切てゝ只一思ひ、苦痛させぬ腹がいゝ、娘の敵初太刀ゝ此母、跡ゝ聳殿刀を借と、かい〳〵敷も裾引上向ふ目當ゝ奴ゑあらず、油斷太郎が弓手の豁突込刀ゑ宅内ゝ、命拾ふて逃て行、直禰太郎ゝ急所をさゝれもがき苦しむ息の下、身共ゑ何の科有て老悖めがといゝせも果ず、覺へないとゝいゝさぬ〳〵、我科を人ゑぬり、成敗をして見せだて、裾はせ折た下着のつま先切て有、其切ゝ立田が口ゑ聲立させぬ無理殺し、齒をかみ去め放さぬ裾先、切た事を打忘れ、儕が科を儕が顯ゝす極重悪人、死駭の前で敵を取母が娘へ手向の刀、肝先

へこたへたかと、大の男を仕とめる老母迚よ河内郡領の、武藝の筐殘されし後室とこそ云られけれ、稍時移れゞ判官輝國只今是へ出と、家來が申すよ老母ゝ驚き、丞相ゝ先程お立誰を迎ひよ、心得ぬ事ながら此方へ通しませい、かりや姫ゝ奥へ行きや、こいつゝまちつと苦痛をさすと、刀を其儘體押退出向へゞ、輝國も早入來り、お迎ひの刻限ゞは用意よくゞ早お立と、ヤすす詞の先折て、イヤコレ輝國殿何おつゝやる、丞相の迎ひよ足下の家來が先程見へ請取て歸られたゝもふ一時も先の事、ヤアこれ〳〵伯母ゞは、身が家來よ渡たと旁以て心得ず、鷄の聲よ刻限量り只今鳴た旅宿の鷄八つよ參る迎ひの約束家來といゝふが、直に身共が參つた迎、刻限も來らず鷄も鳴ぬ先、渡したといふてゝ濟まい、船がゝりの其間伯母ゞよ逢すゝ此輝國が情の用捨、今日の今よなつて名殘も一倍嶋へゝやらぬ渡したといへゞ夫で濟と鼻の先な女子の了簡、菅丞相の怨よこそな

れ爲よいならぬ、僞りな申されそ、イヤ僞りい申さぬ、庭で鳴た鳥の聲、そこへござつた迦の乘渡したよ違ひいないが、請取ぬとおつゝやるので、娘が最期覺めがあのざま、思ひ合せバさつきよ來たい贋迦ひ、コレ伯母ゝ、内の騷動死人の有うへ贋迦嘘でい有まい、識者共の所爲で有ふ、一時違へバ三里の後れ、ぼつ付て取返さんとせきよせいてかけ出す輝國、ヤア〳〵判官先待れよ、菅丞相い是よ有と一間ゟ出給ふ、覺壽い惚りさつきよ別れた菅丞相、そこよいどふして〳〵と不審の立も道理也、判官輝國打笑ひ、ぬけ〳〵とした伯母ゝの僞り暫時の仰天、丞相是よ、ましませバ輝國が安堵〳〵、見へ渡つた此ゝ難義譯も聞たし力よ成て進せたけれど、私なちぬ警固の役、目、早刻限も移りぬれバいざゝ立と勸むる所よ、先程見へた警固の役人、たつた今門前迄、何ゑや警固がハテよい所へ戻られた、嘘つかぬ覺壽が證據是へ通し、輝國殿へ見せませう、イヤ身が名を衒た贋役人、

直ぐに逢てゝ悪かるべし、忍んで様子を窺ゝんと丞相諸共一間の障子引立内に隠れ居る、興に先立警固が大聲、老母、輝國の名代とけあなずり、とでもない物身共に渡し能ぬつけりさゝれたの、是ゝ迷惑、菅丞相を請取ながら、とでもないと何おつ云やる、アレまだぬつぺり、丞相ゝ丞相でも、木で作つたいてつちゐいらぬ、肉付の菅丞相、替る氣で持て來た木像、コリヤ此興に乗といふに覺壽も心付ヱ、添い、扨ゝ魂を込らをし木像で有たかい、猶も證據を見屆けんと心の悦び押隠し、なたの云ぶん合點がいかぬ、其木像見せさつ云やれ、云やちこばつた荒木作り、今見せふと明る戸の興に召たゝ木像ならぬ、優美の姿菅丞相につと笑ふて立出給へば、警固ゝぎよつと狼顔、覺壽も違ひし心當障子の内と今見る姿、心どきまぎ疑ひながら、よふ戻して下さつた、慥に伯母が請取ました、どこへ〳〵そもやならぬ、とゝいふ物の、連て歸つて見たのゝ木像、すりかへ

られたと氣が付て、かへゝ戻つた爰でいほんの皆丞相、おれが目の悪いのか、見所ゝ寄てかいるかいイヤ替らふがかいるまいが戻された皆丞相、いざこなたへと立寄覺壽、ヤア箆太いと突飛し丞相を又輿ゝ乘、戸を引立て家來ゝ向ひ、コリヤわいらも樣子を見る通り、いかゝしても怪しい事共、此分でい歸られず念の爲家搜しすると、踏込先ゝ直禰太郎、半死半生のた打苦しみ、なむ三寶太郎樣が切れてござる、旦那〳〵と呼聲ゝ警固の中から親、兵衛前後もさらゝ辨へず走寄て引起し、コリヤ躰、此深手いどいつが所爲、相人をしらせと氣をせいたり、のふ兵衛殿相手い姑、わしが手ゝかけた、ヤア鞆を手ゝかけ落付自慢、何科有て身が躰をヤアとぼけさゑやんな姪殿、そいつが立田を殺した時、こなたも手傳ひ仕やろがの、娘の敵切たが何と、贋迎ひの棟梁殿、何も角も顯れ時、さつぱりといふた〳〵、エヽ、殘念〳〵、躰めが出世を思ひ、時平公ゝ一昧して菅丞相を殺さん爲、鶏ゝ

宵鳴させ、十が九つ仕課せた兵衛が方便、腐り婆めよかぎ出され殺された躬が敵覺悟ひろげと飛かゝるをゃァさゝさせじと判官輝國、こかげより顯われ出覺壽をかこふてつつ立たり、ゃァどなたが出てもびく共せぬ、兵衛が工みの破れかぶれ死物狂ひの働き見よと、切てかゝれぺかいくゝり持たる刀踏落し、利腕つかんで引くりかへし、足下よ踏付大音上げ、輝國が家來共、贋者めらを片端からくゝれ〳〵といふ聲よ、始めのざせいぬけ〳〵よ一人も殘らず逃失たり、覺壽ゝとつかゝ輿の戸の明る間嘸やお氣詰りと、内を見れぺてゝいかよ筐の木像又惚り、是ゝいかよと立歸りてなたの障子押明れぺ、伯母ぼ騷せ給ふなと、菅丞相のぼ詞、爰でも惚りかしてでも、惚りびくりよ心の迷ひ、どちらがどふゑや輝國殿目利なされて下されと、問るゝ人も問人も鞆果たる計也、丞相重て、輝國の迎ひ遲參故、睡む共なく暫時の間、物騷しく聞へし故窺ひ見れぺ、兵衛

が工み太郎が所爲、立田の前いはかなき最期是非もなし、伯母ぼの心底さこそ〳〵、某是へ來らずばかゝる歎きも有まじと今更悔みのぼ涙、娘が命百人よも、かへがたき大事のお身、怪我過のなかつたを悅びこそすれ何の泣、何の〳〵といふ目よ涙、のふ輝國殿、惡事の元い其兵衛、世の隙を早ふ〳〵、太郎も俱よと立寄て髻引上、丞相の堅固の有樣、儕親子よ見せたが本望、娘が恨も晴つらんと刀を拔ば息絶たり、(ヱ)憎いながらも不便な死ざま、有爲轉變も世のならひ、娘が最期も此刀、母が罪業消滅の白髮も同じく此刀と、取直す手よ髻拂ひ、初孫を見る迄と、貯ひ過した(詞)耻白髮、孫い得見いで憂目を見る娘が菩提逆緣ながら吊ふ此尼、種〻因緣而求佛道、南無阿彌陀佛と唱ふれば、菅亟相も唱名の、聲も涙よ回向有、判官輝、國大きよ感じ、伯母ぼ前よ先とられ跡よさがつた儕が成敗、强欲非道の皺頭と水もたまらず打落す、覺壽い木像抱抱菅丞

相の右手の方、に座を並べて直し置、兵衛親子が工みも顯れ、何も角も納りし、此木像の不思議な働き、かゝる例も有事かや、いやとよ最前もいふ如く、匹夫〳〵が工みも顯れ、我急難を遁れしも、暫時の睡眠前後れ去らず、木よ彫筆よ畫例い本朝名高き繪師、巨勢の金岡が書たる馬い、夜な〳〵出て萩の戸の萩を喰、唐土よも名畫の譽れ、呉道子が墨繪の雲龍雨を降せし例も有、又神の尊像木佛などの、人の命よかいらせ給ふ例いかぞへ盡されず、菅丞相が三度迄作り直せし物なれば、木よも魂備いつて我を助けし物ならん、讒者の爲よ罪せられ、身い荒磯の、島守と、朽果る後の世迄筐と思し召れよと、仰い外よ荒木の天神、河内の土師村道明寺よ殘る威德ぞ有がたき、輝國四方を打眺め、思いざる義よ隙を取、夜も明はなれいへば立ぞふと申すよぞ、又改る、暇乞、伯母が寸志の餞別せん用意の物こなたへと、かりや姫の上着の小袖かけたる伏籠諸共よ、に傍

近く取直させ、浪風あらき楫枕餘寒を凌がせやさん爲、伯母が心を薫ぜめた小袖を島迄召るゝ樣よ、輝國のお世話ながら賴まするゝ有ければ、是い宜しき進せ物、苦の香防ぐとめ木の小袖家來よ持せ參らんと、立寄伏籠よ手をかくる丞相ぜしと、とゞめ給ひ、恩を厚く迄給ふ伏籠よかけし此小袖、中なる香いきかね共、名い大方伏屋かかりや、伯母は前より道具が、や請し女子の小袖、我身よいあいぬ筈、身幅も狹き罪人がたゞ此儘よお預けやす、我子袖と思し召、立田の前が退善の、佛事も俱よと伯母は前の心を悟るは詞、骨身よこたへ忍び兼思いおわつと聲立て、歎くよ扨いと輝國も心を、感じぜはれ入る、覺壽が心い伏籠の內、泣たい結句あの子が爲、別れよちよつと只一目伯母が願ひを叶へてと、立寄袖を引とゞめ、お年故のそら耳か、今鳴たい慥よ鷄あの聲い子鳥の音、子鳥が鳴ゞ親鳥も、鳴い生有ならひぞと、心の歎きを隱し歌、鳴ゞこそ、別れを急ゞ

鶏の音の、聞へぬ里の、おかつきもがなと詠じ捨、名殘いつきずゐ暇と立出給ふに詠歌より、今此里よ鶏なく羽たゝきもせぬ世の中や、伏籠の内をもれ出る、姫の思ひい羽ぬけ鳥、前後左右をかこまれて父い元より籠の鳥、雲井のむかし、忍べるゝ、左迁の身のに歎き、夜い明ぬれど心の闇路、照すい法のに誓ひ、道明らけき寺の名も、道明寺迚今も猶榮へまします神の生るが如きに姿矣よ殘れる物語り、盡ぬ思ひよせきかぬる涙の玉の、木槵樹、珠數の數〳〵くりかへし、歎きの聲よ只一目見返り給ふに顔べせ、是ぞ此世の別れとい去らで別るゝ別れなり

○第三

鳥の子の巣よ放れ魚陸よ上るとい、涙人の身の喩種、菅丞相の舍人梅王丸、主君流罪なされてより都の事共取賄ひ、に臺のお行衛尋んと笠ふかべ〳〵と深緑、土手の並木よ指かゝれべ、向ふからも深編笠我よ違いぬ其

出立、互に夫ぞと近く寄、梅王丸か、コレハ〳〵櫻丸、ヤレそちよ逢たかつた、ヤ咄す事聞事有と兄弟こかげよ笠傾け、扨先とハふ其方ハ日外加茂堤より、宮姫君のに跡慕ひ尋行しと、内寶八重の物語り、何とお二方よ尋逢たか、成程道よて追付奉り、菅丞相に流罪と聞より對面なさしめ奉らんと、安居の岸迄に供せしよに對面叶ハず、輝國殿の計ひよて、に歸洛願ひの妨とに二方のに緑も、切れ、姫君ハ土師の里伯母君の方へに出、齋世の宮樣ハ法皇のに所へ供奉し奉り事治りしと云ながら、納らぬハ我身の上、冥加よ叶ひお車を引其有がたい事打忘れ、賤しい身よて戀の取持終よハに身の怨と成、宮御謀叛と讒言の種拵へ、御恩請たる菅丞相樣流罪よならせ給ひしも、皆此櫻丸がなす業と思へバ胸も張裂ごとく、けふや切腹、あすや命を捨ふかと、思ひ詰ハ詰たれど、佐太よおハする一人の親人、今年七十の賀を祝ひ、兄弟三人嫁三人、並べて見ると當春ハ悦びいさみおハ

するゑ我一人缺るならば不忠の上ゑ不孝の罪せめては祝儀祝ふた上と詮なき命けふ迄もながらへる面目なさ推量有梅王と、拳を握り歯を喰しめ、先非を悔たる其有様梅王も理りと暫し詞もなかりしが、道理〳〵、我迚も主君流罪ゑ逢給ふ上い、都ゑとゞまる筈なけれど、は館沒落以後御臺様のお行衛ゑれず先此方を尋ふか筑柴の配所へ行ふかと取つ置つ心いはやれど、其方がいふごとく年寄た親人の七十の賀の祝ひも此月、是も心ゑかゝる故思いず延引、互ゑ思ひい須彌大海、是非もなき世の有様と、兄弟顔を見合せて涙、催す折からゑ、鉄棒引て先拂ひ先退て片寄れと雑式がいかつ聲、梅王立寄どなたぞと尋れば、本院の左大臣時平公吉田へのは參籠出ゑやべつて鉄棒くらふなと云捨て急ぎ行、何と聞たか櫻丸、齋世の宮菅丞相を憂目ゑ逢せし時平の大臣存分いいふゑや有まいか成程〳〵、よい所で出つくいしたと、兄弟道の左右ゑ別れ、尻

引からげ身搆へし今や來ると待居たる、程なく轟く車の音、商人旅人も道をよぎる時平の大臣が路次の行粧さながら天子の、ごとく、隨身靑侍前後ゑ列し大路せばしと輾らせたり、兩人こかげを飛で出車やらぬと立ふさがる、何者なれぺ狼藉すると顏を見れぺ松王が兄弟、梅王丸櫻丸、ムヽ聞へた、主ゑ放れ扶持ゑ離れ、氣が違ふての狼藉か、但しゝ又此車時平公と云つてとめたか云らいでとめたか、返答次第兄弟迎用捨ゝせぬと、白張の袖まくり上摑ひしがん其勢ひ、梅王丸云せ笑ひ、いふな〳〵、氣も違ゝねぺ此車見違へもせぬ時平の大臣、齋世親王菅丞相讒言ゑよつてゐ沈落、其無念骨髓ゑ徹し、出合所が百年めと思ひ設けし今日只今、櫻丸と此梅王牛ゑ手馴し牛追竹、位自慢で喰ひ肥た時平殿の臏二つ三つ五六百くらゝさねぺ堪忍ならぬ、いゝれぬ主の肩持顏出云やぱつて怪我ひろぐな、法ゑ過た案外者ぶちのめせ引くゝれと、供の

侍聲〻よ前後左右よ追取巻、兄弟ハ事共せず、取てハ投退掴んでハぶち付〳〵投付れバ傍よ近付者もなし、松王いらつて、命をしらずのあばれ者、何れもハは搆ひ有な、は主人の目通は奉公ハ此時節兄弟と一つでない忠義の働きゑ目よかけん、コリヤやい、松王が引かけた此車とめらるゝなら留て見よと、鼻づら取て引出す車、櫻丸梅王丸爰よなくバいざしらず、一寸なりとやつて見よと、兩人轅よ手をかけて、エイ〳〵と抑戻せバ牛も四足を立兼て跡へ〳〵とすさり行松王車の後へ廻り、兩手をかけて力足やらんやらじの諍ひハ、世にも希なる三つ子の舍人互よ劣ぬ主思ひ、命限り根限りやつつ戻しつ引合車、大地ハ藥研と堀穿土よへ込車の轍、ヤア面倒な畜生めと、覜を放せバ逸散よ牛ハ離れてかけり行車の内ゆるぐと見へしが、は簾も飾も踏折〳〵踏破り、顯ハれ出たる時平の大臣、金巾子の冠を着し天子よかハらぬ其粧赫〻たる面色よて、ヤア牛扶持く

ふ青蠅めら、轅よとまつて邪魔ひろがゞ轍よかけて敷殺せ、左いふ大臣を敷殺さんと、二人が力よ車を宙だめ、引くりかへすを返されしど、捻合松王右へ押ゞ左へ押し、上つおろしつ二三度四五度、笑をせんどゝ揉合しゝ祭りの神輿よ異ならず、時平ゝ上ゟ金剛力、どうと踏だる其響き、車も心木もこな微塵、粹けし轅を銘〻提大臣を打んと振り上る時平よ向ひ推參也と、くゝつと睨し眼の光り、千世界の千日月一度よ照すが如くよて、追の梅王櫻丸、思ゝず跡へたぢ〳〵五躰すくんで働かず無念、〳〵と計なり、何と我君のゆ威勢見たか、此上よ手向ひするとゆ目通りで一討と、刀の柄よ手をかくれゞ松王待〻と、車より飛でおり、金巾子の冠を着すれゞ天子同然、大政大臣となつて天下の政を執行時平が、眼前血をあらすゝ社參の穢れ、助け憎ひやつなれ共下郎よ似合ぬ松王が働き、忠義よ免じて助けてくれる、ハレ命冥加なうづ虫めらと邊り

を、睨んですゝみ行、ふり返つて松王丸、よい兄弟を持て兩人共ゝ仕合者、命を拾ふた有難い忝いと三拜せよと、いゝれて兩人くわつとせき上、ヤ、儕ゝも云分有共、親人の七十の賀祝儀濟迄、ナフ梅王、テ、其上でゝ松の枝ゝ切折て敵の根を斷葉を枯さん、テ、夫ゝ此松王も親父の賀を祝ふた跡で、梅も櫻も落花微塵、足元の明い中早く去〳〵、ヤア推參な歸るを儕ゝならゝふかと、詰寄〳〵兄弟三人、互ゝ殘す意趣意根睨んで、左右へ、別れ行、春さきゝ、在〻の鋤鍬迄も樂々と、遊びがちなる一農、一番村で年古き人ゝ知れし四郎九郎、律義一遍屑ゝて菅丞相のに領分、佐太ゝ手輕き下屋敷お庭の掃除承ゝり、松梅櫻に愛樹ゝ土かい水の養ひも、根が農の鍬仕業我身の老木厭なく、幹をこやしの百姓業畑の世話より氣樂也、堤端の十作が鍬打かたげ門口から、四郎九殿内ゝかと這入を見付けこりや十作畑へか、イヤ今仕廻ふて戻つたりや嚊がいふゝゝ、何やら目出たい祝ひ玄

やてゝ、大きな重箱ゑ眼へはいる樣な餅七つ、朝茶の鹽ゑも喰足ねど賀ゝぬ方も添い、禮も云たし、祝ひとゝゝ何でござる、サイノ菅丞相樣のふつて涌たは難義、お下ゑ住ふらゝが身祝ひ所ぢやなけれど、せゑやならぬさかいでするゝするが、世間へも遠慮が有て、彼岸團子程な餅七つ宛配つたゝ此四郎九郎丁七十、此春年頭のお禮ゑ登つた時ふらが年をお尋、七十とゆたりや、古來稀な長生、其上珍らしい三つ子の爺親、禁裏からは扶持下され、盼共ゝ御所の舍人目出たい〳〵、產れ月產れ日產れ出た刻限違へず七十の賀を祝へ其日から名を改とて、ノウ聞ぢやれ、伊勢の御師か何ぞの樣ゑ白太夫とお付なされた、則今日が誕生日、白黑まんだらかいゝ掃溜へほつて退け、けふから白太夫と云ふ程ゑそふ心得て下され、夫ゝめでたい、次手ながら問まぢよ、三つ子產と扶持下さる其謂も聞しやつたか、サイノ死だ女房が產だ時ゝ邊隣の外聞、ひよんな事ぢやと思ふたが

曾原

もつけの幸三つ子の爺親一代ゝ作り取の田地三反、日本計ぎやないげな、唐迄もそふぎやてし、男の子なりや御所の牛飼、女郎なれば東童とやら是も御所でつかはるゝ、法式ゝ添い物、旦那殿ゝ流罪なれど、ふらゝ所も追立られず下された田地ゝ其儘、そちの嘸も若い程よ、産すならふらよわやかりやと咄しの中道、たどりくるゝ櫻丸が女房八重、けふゝ鼻の祝ひ日迎風呂敷包片手よ提、嬉しや爰ぎやと笠取ば、櫻丸が女房八重か、早かつた〳〵、外の嫁子も揃ふてくるか、マア〳〵上つて拘へも解きや、アイくまだ皆樣ゝお出ないか遲かろと氣がせいて、淀堤から三十石の飛乘船の足の早いので草臥もせず早ふ來たが仕合せでござんする、ヤコレ四郎九殿、お客そふなもふいよまぎよ、ヱヽ是四郎九とゝ物覺がない十作、白太夫早忘りやつたかいの、イヤ忘ゝせぬわいの、餅の祝ひとゝ格別名酒呑ねばいつ迄も四郎九郎、ハレ、ヤレ盛た酒を飲ぬとゝ但しゝまだ呑足ぬか、ヱヽぬけ

〳〵と嘘いふわちよおらよ酒いつ盛た、さつきよ盛た、コレ樽や徳利い目よ立故、餅の上へ茶筅の内で、酒鹽打てやつたので、二度の祝ひ濟だゑやないか、エ、夫で聞へた、嘘が酒くさい餅ゑやと云た、外へい遠慮でそふ仕やろと、おらい日來懇だけ、晩よ來て寐酒一ぱい、お客是よと出て行、嫁女コレ聞きやつたか、今の世の人いきめごまかで、おらが始末の手目見付て、晩よきて寐酒給ふ、ハ、ハ、ハ、せち賢い懇ぶり、イヤ又お前も餘りな聞も及ばぬ茶筅酒ホ、〳〵、〳〵と嫁と舅の睦じさ、梅王松王兄弟の、女房がくる道草も、女子の手業笠よ摘迅滿公薺蒿、枸杞の垣根を目印よ、髮ゑやお春ゑ先へ、イヤお千代ゑからと相嫁同士が門での辭宜合白太夫おかしがり、一時よ産れた三つ子の嫁共、先の跡の所かい、八重がとふから待て居やるどちこちなしよはいれ〳〵、ほんよ八重ゑ早かつた、ござんする道なれや春が所へ誘ふても下さんゑよかと、待た程が遲ないつて心せきな道

すがら、千代泡よ行合て連立てくる道轉業けふの祝ひの浸よと蘐蒿蒲公二人の仕業、夫いよふ氣が付た、春泡誘ふ約束も、日脚のたけたよ氣せきして寄事も忘れたよ、おちよ泡といよいお出合、サイチおはる泡よ逢たいわしが仕合せ、賑やかな道連、夫いそれ玄やが親父樣料理の拵へ出來て有かへイヤ出來てない、わごぢよ達よさす合點、てく〳〵とむづかしい事い入らぬ、けさ搗た餅で雜煮仕や、上置いゑれた昆布、隙の入らぬ樣よ茹て置た、大根も芋もそこよ有勝手い知まい、ヤア名い〳〵と立上れバイヤ、けふの祝ひいお前が目當、料理方の出來る迄、何よも構いず一寢入なされませ、勝手玄らねど三人寄て何も角も取出す、そふ玄やて〻立た次手棚な物下してやろ、コレ〳〵是見や、祖父の代から傳いつた根來椀玄や、折敷も拾枚、おらが息災なも此椀折敷、堅地な迚かんまへて手荒ふ當るな嫁女達、此マア躰共いなせ遲い來る迄よ一鼎、と體を横よ差枕、堅地作りの親

仁也、コレ皆様、何ぼうあの様よおつゝやつても、雑煮計でハ置れぬ、飯も焚ざなるまいし何ハせいでも、鰹鱠道草の薺蒿お汁よよかろ八重ゐ千代ゐ頼ます此若ハ飯仕かけふと手ゝよ俎板摺紛盆、米かし桶よはかり込水いらずの相嫁同士菜刀取て切刻ちよき〳〵〳〵と手品能、味噌摺音も賑ハしゝ白太夫目を覺し、調こりや殆共ハまだこぬか、正月から云れて有ふらが祝ひ日、油斷せふ筈ハないが、ゝ、此中誰やら、ゝ、それ〳〵、今いんだ十作が咄しよハ、時平殿の車先で三人の子供か大喧嘩、聞てかと云らしてくれた、喧嘩の様子嗔達ハ云つて居よ、車先での事と有ゞ、時平殿よ奉公する松王が女房、爰へ來て様子をいやと名ざしよ合たハ千代が迷惑お祝ひごとのすむ迄ハお前の耳へ入れぬがよいと、三人ながら其心、いちぬこと喋られて隠されねゞゆます、調梅王様櫻丸様、二人の相手よこちの人日頃の短氣云上つて兄弟喧嘩、云たが氣づかひなされますな、三人

ながら怪我もなく、其場い夫で濟だれ共、もちやくちや云て居られます、春泡八重泡お前方もそふであろ、氣の毒な男の不機嫌成程〳〵、千代泡のいいんす通り、けふの祝ひを云ひ立て兄弟泡の中直し、親泡のお詞からいでいと、男思ひの壁訴訟、わごりよ達よ問たらば知れふと思ふた、喧嘩の筋、知て居てもいいぬか、同し胤腹、一時よ生れた躰でも心い別〻、よふ似た顔を二子といへど、夫もそれよい極らぬ女夫子も有又顔の似ぬ子も有、ヤア大概顔が似れば心もよふ似て、兄弟の中も能物ぢや、おらが躰共誰見ても一作とい思いぬ、生ぬるい櫻丸が顔付、理屈めいた梅王が人相見るからどふやら根性の惡そふな松王が面がまへ、ヤ千代が傍で鹿相いふた氣よかけてたもんな、ヤア怪我がなふて嬉しうおりやる、怪我の次手よ、孫めい健なか、連て來て顔見せいで、ヤアとかふいふ中もふ七つぢやおれが生れたい申の刻限、料理も大かた出來たであろ、嫁達膳を出

さぬかい、イヤ〳〵刻限の過るまで連合衆いなせ見へぬ、ちよゐ八重ゐ道迄いて見てこまいか、爰で待より三人ながらでざんせいかふ、ヤア嚊達何云ぞい子供共い來て居るわい、ナノ來て爰やとゝどこよ〳〵、ヱ、どんな嫁共そこよ居るを得ゑらぬかい、コレ三本のあの木が子供等、梅王松王櫻丸、顔い殘らず揃ふて有、勿躰ない管丞相樣くゝめるやうよいい爰やました生れ日の刻限が違や惡い、祝儀よいかげの膳も居るならひ、サア〳〵早ふと白太夫が、いふよ猶豫も成がたく俄よ盛やら箸打やら、椀の向ふの小皿よ鰉先一番よ親父樣是でお居りなされませと給仕い元よりならいねど見馴聞馴擧動ひ八重が配膳御所めけり、イヤおれもあそこへいこ、イヤ士問でい冷が上ります、やつぱり爰でと押備へ是から面〻夫の給仕膳を捧げて庭よおり、此梅の木が梅王殿、枝ぶりすんと日頃の氣質、八重が連添男ぶり、木ぶりも、吉野の櫻丸、是い千代迄添遂る、女夫が中の若緑色も

艶〻勢ひよい松王殿で子達も揃ふ、親父様目出たふお箸なされませ、なされふ共〳〵、親がいよ座が高い、子供共へドレ挨拶もふそれよい及びませぬお加減のさめぬ内〳〵お春そでお玄やらぬ親でも子でも極つた辭宜作法と、庭よおりるもまめやかよ樹の前よ畏り是子供衆、何よもござあず共よふまいつて下されい親が折角おりての辭宜辭宜返しが仕たふてもいでかれぬい知て有、爰で〳〵、ハヽヽ、嗅達餅を替やいのと尻もちついて悦び笑ひ、我膳よ押直り、箸を取より〳〵扨盤梅玄や味いい〳〵、三人の嫁女達、給仕も片いきせぬ樣よ、三杯い喰合點で、ふしやらしまする玄やなんよ玄、ハヽヽ、こりや新しい三方土器誰が持て來ましたぞ、夫い八重洲の氣が付て添い、春も何ぞくれるかいほんよ忘れておりましたと扇三本袖土産、中の繪い梅松櫻お子達の數を祝ふて、三本ながら末廣がり目出たふ祝ふて上げまする、こりやめでたい添い、

中の繪も喞しで知た、明て見るよ及ぺぬ此儘〳〵、コレ戴きます〳〵と機嫌よ千代が袂から、是ゝ切の有合で私が縫た手づゝ頭巾、つむりよ合ず縫ゝ直さふお召なされて下さんせ、ヤ、どれも〳〵不足もない心付なおくりやり物、サア盃も濟だゝ、おれが膳から上てたも、子供等が膳ゝ盛た儘冷たで有ふ盛直してコレ嚊達、二人前づゝ喰てたもや、イヤ〳〵私等ゝまそつと待て、主達が見へてから打並んで祝ひまゑよそんなら夫よ、おれゝ村の氏神樣へ參つて來ませう、そんならお參りなされませ、ヤ、〳〵往きまゑよ、拵へて置た十二銅そこよ有取てたも、三本の此扇末廣ふよ、子供の生先氏神へ頼んだり見せたりせう、ヤア八重ゝまだ參るまい、次手ながら連立ふ、サア〳〵こちへと機嫌よふ表を、さして、出て行、コレちよゐ、年寄ゑやつても物覺へがよい事、こなゐや此春ゝ氏神樣ゑつて居る、八重ゐゝ今が始め、いゝゑやんすりや其通り、物覺へのよい親ゐよ違ひ、物忘れする子供

達、松王殿なぜ遲いぞ、こちの夫もなぜ見へぬ但しいこぬ氣か、けふ見へいでよい物かいな、それこそそこへ松王殿、是女房を立そゑ立して刻限過たをゑらずかい、べり〳〵とかしましい、時平樣のお用有て夫仕廻ねばいでかれぬ、先へ參つて其譯いへと云付たを忘たか、梅王も櫻丸もまだこぬそふな、親仁殿も内ゑでぎらぬ、其親父樣ゑ八重ゑを同道でもちつと先に氏神參り、兄弟衆ゑまだ見へぬ、見いな、遲いといふかれゑ主持、梅王も櫻丸も主なしの扶持放され、用もないわろ達が遲いのがはんのおそいの、おはる殿そじやないかと、詞の端ゑも殘る意趣、梅王も日脚ゑたけるせいて來かゝりつつかゝり松王ゑゑ顏ふり背け、千代殿けふゑ太儀、女共親人と櫻丸八重も矣ゑゑなぜ居やらぬ、今も松王殿のお尋、櫻丸樣ゑまだ見へぬお二人ゑ宮參り、櫻丸ゑどふしてこぬな、待兼る者ゑこいで、胸のわるい見とむない頻がまへと、梅王ゑ當

こすられ、松王丸逸徹短慮、あたゞの悪いねすり言いひ分有ば直よいやれさ、何のわれよ遠慮せう、わが頬がまへを見る度〳〵ゲイ〳〵と虫唾が出るべ、ハレヤしたり腹の皮、此松王ゝ生れ付て涙もろい、櫻丸やそちが様よ、扶持放されの疲頤い、肚餓からふと思ふて遣が兄弟のよしみだけ、ホ、扶持放されと笑ふやつが、喰ふ扶持がろくな扶持か、鉄丸を食すといへ共、心穢れたる人の物を請ずとゝ八幡大菩薩の御託宣、心汚れた時平が扶持有難ふ思ふゝな、人でなしの猫畜生、畜生とゝ舌長な梅王、今一言いふて見よ、ホ、望なら安い事、畜生〳〵どふ畜生、最赦されぬと松王丸刀の柄よ手をかくれば、梅王も反打かへし詰寄詰よる二人の女房、是ゝ、ヤア ふとましい氣が違ふたか松王殿と、ちよが夫を抱とむれば、七十の賀を祝ひよ來て親父様よ逢もせず、反打てどふさ云やる祝ひ日よ拔てよいかこちの人梅王殿と、刀の柄よしがみ付、女房春を取て突退、七十の賀でも祝

ひ日でも、堪へふくろのやぶれかぶれ留立して怪我するな、コリヤ松王後れたな、女房が留るを幸よ頬げたよ似ぬ腕なしめ、チ、留らるゝを幸いとゝ、我心よ引くらべて松王よゝ慮外の雑言身が女房が留たよりそちが女房が、親よもまだとの一言、肝先へきつと當り、こらへ〳〵こらへたがもふたまらぬ、眞劍の勝負ゝ親人よ逢ての後、夫迄の腹いせよ砂かぶらせぬゞ堪忍ならぬ、ちよよ是を預けると両腰拔てほうり出し、裾引からげて身拵へ、ゝ畜生めがこりやよい了簡、櫻丸が來る迄ゝ松王が命松王よ預けると、同じく両腰ほうり捨、刃物を渡せゞ血ゝわやさぬ女房共邪魔するなとつつと寄て様よ足下へ踏落せゞ、早足の松王落さまよ諸足かけゞ梅王丸眞逆様よ落かさなり、摑み合い、擲合、組でゝ放れ離てゝ又組合い捻付け引伏蹴つ踏づ、双方力も同年血氣盛りの根くらべ千代と春とゝ二人の両腰、取られもせうかと氣づかい半分傍へも寄れず、ア〳〵と

心をあせり氣をもみ上、どちらが勝も負もせず擲き合たが二人の存分梅王殿もふよいわいな、松王殿もふ置玄やんせ、やめて〳〵といふをも聞ず、勝負つかいでむだ働き、投てくれんと松王丸、かさよかゝつて押力、ひるまぬ、梅王つゝかくる、肩先ひねつてかつくりさせ、横よ抱へる松の木腕、劣ぬ肘骨、梅の木腕、からみもぢつて押合力、双方一度よこけかゝりもたるゝ拍子櫻の立木、土際四五寸殘る木の上へぽつきりぐへつさりと、折れたよ驚く相嫁同士、二人が勝負も破角力俱よ靭れて手を打拂ひ、うろつく中へ早下向、親父様のお歸り玄や、白太夫様のといふ聲よ、二人へ肩入裾おろし、腰刀指間も有ず戻られし、年へ寄つてもこへいへ親、上へも上らず犬蹲踞、けふのは祝儀は目出たいと、祝儀へ述ても赤面し塵をひねらぬ計りなり、親へほや〳〵機嫌顔、嘸達が先へ來て七十の賀を祝ふてくれたで、けふの祝ひへさらりと仕廻た、玄れてある刻限遲い

ん何ぞ障りが有てこぬよ極めた、梅王松王よふこそ〳〵來てくれた、二嫁女養くちたで有ふが雜煮祝んしてたもつたかと、折た櫻ん見ながらも誰仕わざぞと咎めもせず、呵る所を呵らぬ親一物有と云られたり、梅王丸懷中ゟ用意の一通取出し、祝儀濟でしんへば私の所存の願ひ、是よ書付ひと親の前よ指出せば松王も又一通身の上の願ひ是よ有と、同じ所へ直せしんいひ合せたるごとく也白太夫打笑ひ、心安いん親子兄弟夫婦、斯並んだ中願ひ有ば口でんいんいで、ぎつとした此書付、さらばおらもぎつとして代官所の格で捌こと、願ひ書手よ取上つぶ〳〵讀も口の中、願ひん何やら聞へねど、春と千代とん夫の心知て居る筈跡先を、云らねば案じる八重一人、三人の兄弟、鬪諍親父樣お頼みヤ、けふ中直しと云合したちよゐ春ゐてりや何ぞい、何をいふてもこちの人、櫻丸殿ごらぬ故心當が皆違ふた、道で眩暈が發つたかと見へぬ男を案じるやら、

二人の願ひも氣よかゝり、小首傾け案じ居る、親父ハ二通讀仕廻、梅王、そちが願ひよ旅へ立隙くれとハ、ム、推量するよ外でも有まい、菅丞相のござる嶋か、成程〳〵、結構なは殿よ引かへ、垣生の小屋のは住居、は用聞人なけれど、梅王下つては奉公仕らん、身のお暇とヤける、ム、恩を知らぬ人面獣心といふてな、顏ハ人でも心ハ畜生、嶋へ參つては奉公がえたいとハ、まんざら恩を辨へぬ畜生けハ離れた心、コリヤやい、は臺ゐや若君樣お變りも遊ばされず、ござる所も知た上旅立の願ひえやな、イヤは臺ゐハ其以來お目よもかゝらず、は座所も存ませぬ、併女義のは事なれど、若君樣とハ又格判、菅秀才のは事ハ慥よといハんとせしが、松王を尻目よかけ慥よ所ハ存せねども、息災よは座有噂、ヤイ馬鹿者、太切な菅秀才、は息災なを聞た計お目よもかゝらず有家も知ず、夫で儕忠義が濟か、女義の身とぬかしおるは臺ゐハ主じやないか、コリヤやい、尤は不自由な配所のお住

居、お傍へ參つては用を聞、膝行役の奉公ゝ此白太夫がよい役ぞやゝい血氣盛り奉公盛り、菅丞相の所縁と有ば、根堀葉堀絶さん迚鵜の目鷹の目、油斷ならぬ讒者の所爲、すゝといふ時身を惜まず、は用ゑ立所存ゝなふて、膝行役を願ふゝ命が惜いか、敵がこゝいか、旅立の願ひ叶ゝぬ〳〵取上ぬと、願書顔へ打付てはつたと睨む老の腹立、道理至極ゑ梅王夫婦誤り入たる風情なり、ヤイ松王、そちが此願ひを見れば勘當を請たいとな、ハア〳〵、神武天皇樣以來珍らしい願ひぢやな、ヱ、不孝といゝ〻譬のないやつ、餘り珍しい願ひなれば聞屆けてくれるそと親の了簡、ハヽハア忝しと悅ぶ松王勇み立、親子兄弟の縁を切所存も問ず赦されしゝ、此松王が主人へ忠義、推量有ての事なるべし、ハヽヽいか樣口ゝ調法な物じやな、主人への道立腑がくねるゝい、道も道ゑ寄てな、横ゑ取て行道を蟹忠義と云わいやゝい、甲ゑ似せて穴を堀と、勘當請れば兄弟の縁も離れ時平殿へ敵對

ば切ても捨ん所存よな、尤善悪差別なく主人義ゝ立よもせい、親の心よ背くを奇、天道よ背くといふわい、望叶へてとらする上ゝ人外め早歸れ、隙取ば親子の別れ竹帚くらゝさふと筋骨立て怒聲、松王ゝ思ひの儘女房こいと引立行、ちよゝ遠よ親兄弟名殘も惜き相嫁の、顔を見るめもあかれぬ涙袂絞つて出て行、嗣ヤレ嬉しや面倒なやつ片付た、ヤイそこな馬鹿者、ば臺若君のば、行衛尋よいかぬかうせぬかと、是も手づよふきめ付られ、そんなら嗚へゝ、サア行所へゝおれが行わい、出て行〳〵をこゝがるおは る、八重ば跡で能やうよ、お詫言をと云捨て、夫婦ゝ門へ白太夫ゝ唾を、呑込で奥へ行、兄弟夫婦よ引わかれ取殘されし八重が身の、仕廻もつかぬ、物思ひ門へ立そよ待夫、思ひがけなき納戸口刀片手よ莞爾笑ひ、女房共嘸待つらんと、聲よ恟り走り、寄ヤアいつの間よやら來た共云ず、案じる女房を思ゝぬ仕方、兄弟衆の事よ付て親父樣のお腹立、其場へゝ出もせい

で、ア何でこな樣ゝ納戸の内よ、エ、これナア譯を聞して〳〵と、聞たがるこそ道理なれ、暫く有て白太夫狹出し鍔の小脇指、三方よ乘ゑほ〳〵と、出るも老の足弱車、舍人櫻が前よ置、用意、能ぺとく〳〵といふよ女房又悔り、ヤア こりや何ゑや親父樣、櫻丸殿どふぞいなア何で死の ゑや、腹切の ゑや、切ねぺならぬ譯ならぺ、未練な根怪さぎや仕ませぬ、こなさんが云れすぺ親父樣の只一言、案じる胸を休めてたべ、お慈悲〳〵と手を合せ泣ゐ、外の事ぞなき、ヤア親人よ何ぼ苦勞、是迄馴染夫婦の中所存殘さず云聞さん、某が主人とヤもお恐れ多き齋世の君樣、百姓の躰なれ共、菅丞相のぼ不便を加られ、親人へゝぼ扶持方、ぼ愛樹の松梅櫻、兄弟が名よ象り、松王梅王櫻丸彈り有や、冥加なや、ゑぼし子よ成下されぼ恩ゝ上なき築地の勤、三人の其中よ櫻丸が身の幸、人間の胤ならぬ竹の園のぼ所奉公、下ゝの下ゝたる牛飼舍人、勿体なくも身近く召れ、菅丞相の姫君とわりなき

中のは み使仕課せたが仇と成て讒者の舌よは身の浮名、終よい謀叛と云立られ、菅原のは家没落、是非もなき次第なれど、宮姫君のは安堵を見届、義心を顯いす我生害けさ早く爰迄來て右の段く生て居られぬ最期の願ひ、聞届けて切腹刀、親の手づから下されたいい女房、我よかいつてお禮もヤ死後の孝行頼むぞと義を立守る夫の詞、女房わつと聲を上、仇成戀路のお媒介、親王様のは悪名、丞相様の流され給ふ其云譯よ切腹なら、此八重も生ていい居られぬ、私い殘つて孝行せいと胴欲よもよふいいれた、夫よりいまだむごい腹切禮をヤせとい、それが何の禮所無理な事いふ手間で、いつそよよ死とコレヤ女房の願ひ立てたべ、親父様の思案いないかコレ蔓いて計でざらず共、よい智恵出してくださりませ、夫の命生死い親父様のお詞次第、お前い悲しうでざりませぬか、親の手づから此三方、腹切刀い何事ぞと、恨つ頼つ身を投伏、もだへてがるく有様い物ぐ

るゝしき風情也、白太夫顔ふり上、子よ死といふ腹切刀、むごい親と思ふいひ譯でゝなけれどな、此曉ゝ我身の悦び、いつもより早く起門の戸明れば櫻丸、早ふ來てくれた陸ならば夜通し、但しゝ船かゝまあこちへと呼入て樣子を聞べ右の次第、白大夫づれが躰よゝ驚き入た健氣者、とゞめても聞入れず、けふの祝儀仕廻迄、女房が來ても逢しゝせぬぞおれが出いといふ迄ゝ納戸の内よ隱れて居いと、一寸延しよ命をかべひ、助けてよいか悪いかゝおらが了簡よ及べず、神明の加護よ任さんと、最前祝儀よくれた扇三本、幸繪よゝ梅松櫻、子供の行末祈る顔で氏神の祠へ直し置、信を取て御闈の立願、櫻丸が命乞、中の繪ゝ上から見へぬ三本の此扇、初手よ櫻をとらしてたべ〳〵、上らせ給へと再拜祈念、取上た扇ひらけば梅の花、南無三是ゝ叶ゝぬ告か、神の心を疑ふ御闈の取直しせぬ物なれ共、助けたいが一ぱいで取直す次の扇、今度も違ふて又松の繪、頼み

も力も落果て下向すりや折た櫻定業と諦めて腹切刀渡す親思ひ切て
ふりや泣ぬ、そなたも泣きやんな、ヤ、ヤ、アレ聞たか女房共櫻丸が命惜まれ
て老人の心づかひ、ハ恩も送らず先達不孝ハ赦されて、下されい、下郎な
がら恥をゑり義の爲よ相果ると、三方取て戴くよぞ、もふ コレ今が別れか
と泣も泣れぬ夫の覺悟、白太夫目をゑぱたゝき、潔い躰が切腹介錯い親
がする、其刀 コレ見やれと、懷から取出すい、願ひ込たる鉦鐘木、コレ此刀で介
錯すれば、未來永劫迷いぬ功力利劍即是彌陀号と、鐘木を取て打鳴す、鉦
もゑどろよ、南無阿彌陀〳〵、南無あみだ、〳〵、南無あみだ、〳〵、
念佛の聲と諸共よ襟押くつろげ九寸五分、弓手の脇へ突立れば、八重が
泣聲打鉦も拍子亂れて、南無あみだ〳〵〳〵〳〵、右のあばらへ引廻
し、憚りながらハ介錯、介錯と後ろへ廻り鐘木ふり上、南無阿彌陀佛と
打や此世の別れの念佛、九寸五分取直し喉のくさりを刎切てかつぱと

伏て息絶たり、八重が覺悟も此場をさらず夫の血刀取上る、枳殼のかげより梅王夫婦走り寄てこりや何事と九寸五分もぎとり捨、親の前ゑ畏り、コレ〳〵先程歸れと有し時表へい出たれど、櫻丸がこぬ不思議と、丞相樣のゐ秘藏有し、櫻の折たを詮議もなされぬ、彼是不審ゑ存るから裏より忍び立戻り、始終の樣子い承いつた、こヱ是非ゑ及ぺぬあの樹と俱ゑ枯し命の櫻丸、兄弟の最期余所ゑ見て、親八の鉦皷ゑ合せ、女夫の者が忍びの念佛、あつたら若者殺せしと、悔む夫婦も聞親も、八重も死れぬ身のくり言是非も涙ゑ、南無あみだ佛と、鉦打納め、撞木とかいる杖と笠、白太夫い片時も早く、菅丞相のゐ跡慕ひ嶋へ赴く現世の旅立、櫻丸が魂魄い未來へ旅立、此亡骸梅王夫婦を賴むぞと、八重が事迄つど〳〵ゑ賴む詞の置土產、冥途のみやげい只念佛、南無阿彌陀佛、〳〵、南無阿彌陀佛〳〵、南無阿彌陀笠打かぶり西へ、行足、十万億土、亡骸送る親送る、生ての

忠義死たる義臣、一樹ん枯し無常の櫻、殘る二樹ん松王梅王、三つ子の親が住所末世よ夫と白太夫、佐太の社の舊跡も神の惠と知れける、

○第四

君を思へばよやヨホイホ結ぼれ糸のハリナとけぬ心がつろでざるいよつろでざる、つらき筑紫よ立年月、ばいたんしや、菅丞相、讒者の業よ罪せられ垣生の小家の起臥も、きのふと暮、てけふん早延喜三年如月半、空も春めく野山の眺め野飼よ、召せ奉り、我樂しみん在郷歌、君を思へばよやヨホイホ調ハ、、、ハア何をがなお氣晴し、ゑんらくさいどつてう聲、牛殿の手前も面目ない、と、見れば見る程見事な毛並、角の搆眼の備へ、頭持の樣子骨組肉あい、惣毛一色眞黑黑牛、渡り繻子も及ばぬ色艶、天角地眼一黑直頭耳小齒違天晴ばな牛はよちよ〳〵らのちよせいと、譽よける、菅丞相んめづらかよ、聞馴鈴んぬ譽詞調イ白太夫春ん耕し、秋ん刈穂の稻を負せ、耕作の助けと成牛

の善悪能く知る筈、天角地眼と申せしゝ角と眼の備への事、一石六斗二升とゝ、牛を買取其價ひ升目を積る物やらん、語れ聞んと仰ける、さつても左たり、天下ゝ有とあらゆる事共、餘さず漏さず知てござる丞相樣、牛の事ゝは存知なく、お尋ゝ預るゝ、百姓ゝ生れた一德、お慮外ながら、〳〵牛の講釋聞度やりませ、一黑と申ゝ、俵物の石目でゝござりませぬ、毛色を吟味する時ゝ、黑いが極上それで一黑、次ゝ直頭とゝ天窓の見所頭とゝ頭、どつちへも傾かず、まんろくなが能さかいで直頭と申ます、耳小の耳ゝ耳小ゝちいさし、隨分耳ゝちいさいを好みます、扨齒違とゝ、きやつがおね〳〵唄を嚙、上下の齒先揃ふゝ悪し、五一ゝ生たが齒違の齒の見所、次第を上から云立れば、一石六斗二升八合、牛の講釋もう仕廻でござまする、誠ゝ性ゝ道ゝ依て賢し、白太夫が咄しを聞、一つの德を得たるゝと、仰ゝひよて〳〵小踊りして、こりやゝあんたる仰ぞい、親の代からは領

分の百姓、三つ子の事迄お世話よなされ、ば恩よば恩有がたふて、寢た間も忘れぬ此親と違ふて、三人の躾共、一人ゝ死る、跡二人ゝ氣も揃ゝず、面倒なやつら打ほうつて、此太宰府へ參つたゝ去年の三月、うそ淋しい不自由なお住居、一年の日數ゝ立ど、月見花見よ出もなされず、けふゝ何と思し召、牛引と有ば意が出て、私が皺も腰も、ア、延やかな春の野面、安樂寺へお參詣ゝ、ば歸洛のお立願でかなでさりませふ、いやとよ我よ科なければ、佛よ苦勞かけ奉り、身の上祈る心ゝなし、讒者の業と云ろし召ば罪なき事も世よ、顯ゝれ、歸洛の勅諚下るべし、夫迄ゝ菅丞相、月よも花よも目ゝふれず私なき臣が心帝ゝ云ろし召れず共、天の照覽明らかなり、安樂寺へ志すゝ此曉不思議の靈夢、菅丞相が愛樹の梅、今如月の花盛り、都の住居思ひ寐の枕の硯引寄て、筆よ任せてかく斗、東風吹ば匂ひをこせよ梅の花、主なし迚、春な忘れそ、と心を延て睡眠しよ、妙なる天童、我枕よ

立せ給ひ、汝憐愍の心深く、仁義を守る忠臣の功、心なき草木迄情を請し主をゑたひ花物いいねど其驗安樂寺へ詣見よと、爾現よ依てと宣ふ所へ、安樂寺の住僧杖を便りよ老の足、夫ぞと見奉りしより、小腰をかゞめ立寄ゞ、丞相鞍より、おりさせ給ひ、住侶の歩行い何國へぞ、我い貴院へ行折から、是よて對面祝着〳〵、ハア愚僧義も外ならず、公のは目よかゝりたく參る子細餘の義よわらず、夜前ふしぎの靈夢の告、は慈愛の梅一樹、配所の主よ見せよと有、爾現よかいらぬ觀音堂の左の方、一夜よ生出るふしぎさよと、語るも聞も正夢の割符を合せしごとく也、是ゞ寺へい程近しと住侶伴ひは歩路、安樂寺よ入り給へゞ、夫ぞとゑるき梅花の薫り袖よ留木の心地せり、暫く是よては詠と床几直させ褥を設、は菓子小竹筒と住寺の饗應、白太夫いこつそこそ梅の土際覗き廻り、こりやふしぎ、イヤ希代ゑや、丞相樣道すがらお住寺の夢咄し、〻何をやらるゝやら、そん

な事がよふ有ふと、誠しない事疑ふておりましたが、來て見て恟り、此木の枝ぶり花の匂ひ、佐太のお下屋敷よ預つておりました、夫ぢや〳〵、其梅でござりまする、ア、神佛の告ハ爭ハれぬ、おらが爰へ來た跡でハ、水一ぱい飲し人も有まいよ、ぶき〳〵とした木の色艶、芽立の氣條つういつい、花ハうさる程付たれば、梅漬の時分二三斗ハ慥よならふ四五升ハ地を借た年貢代、お寺へも進せます、跡ハこつちの實入〳〵、今ハ先腹の實入、ハ馳走酒下さりまえよ、ア、これお酌、白太夫が盃ハ、いつしでも此天目、立酒ハ氣よかしると、床几の傍よちよつしくばひ、口も心も有の儘、見へた通りの律義者、花の眺めよ一入の興を催しおハする所よ、そりや喧嘩よアリヤ拔た、切合てそりやくるハ、寺内へ入な門打といふ間あらせず踏込〳〵、打合戰ふ侍二人、寺僧ハ驚き白太夫ハ座を圍ふてア、これ〳〵、見れば双方旋裝束、喧嘩ハふり物と有つてから爰で仕廻ハ付させぬ、出やれ

〳〵といふをも聞ず、切合一人ん我子の梅王コリヤまあそちん何として、ハテひあいな切れなと、氣をもみあせる親心、詞聲の助太刀相人の刀、梅王よ打落され逃るを透さず飛かゝり、片手つかみよもんどり打せ、膝よかためし健氣の擧動、詞レ〳〵出かした手がら〳〵、手柄んえたが喧嘩の次第、次よんそちが下つた樣子、都の事を案じてござます、幸是よ丞相樣やうす一ゝヤ上い、ハルハア恐れながら梅王が念願達し、かんらせ給んぬに尊躰見奉るん生涯の本望、都よに座有お二人樣、世を忍ぶお身なれ〻いつえよよんに置まされず、若君樣ん武部源藏よ預置、私が妻、櫻丸が女房、八重と春とんに臺覆のに介抱、お身の上ん指置れ、配所の樣子見て參れと、仰よ幸出船の手番、天運よ叶ひ日和まん、千里一刻日數も込ず、夜前此地へ筑紫船乘合の中よ時平が家來鷲塚平馬、詞此梅王を見えらぬ馬鹿者、ふづくりかけて樣子を問〻、菅丞相を殺しよ來たと、儕が口から最期を急ぐ、寺よで

ざるをよふ云つて直ゞ仕かける不敵者、梅王がは土産と早縄かけてぐつと、云め上、椽柱ゞ猿つなぎ心地よくこそ見へゞける、丞相は悦喜浅からず、戀しき都の樣子を知ず、忠義の花ゝ、有情の梅王、爾現ゞよつて飛來る花ゝ非情の此梅の木、有情非情も隔なく菅丞相を慕ひくる、梅ゞ褒美のは言の葉、梅ゝ飛櫻ゝ枯る世の中ゞ、何迚松の難面かるらん、つれなかるらん松王ゝ時平が舍人、枯し櫻ゝ宮の舍人、梅王ゝ我舍人、花の榮へゝ安樂寺其名も高き飛梅のふしぎゝ今ゞ隱れなし、詞梅王、有がたい今のは歌、此梅ゞ淮へ其方をお譽遊ばし、櫻ゝ枯る世の中とゝ、死だ躰をは悔み、つれなかるらんと有松王めゝ、時平ゞ追從云ておろな、ホ、親人の推量違ゝず、兄弟といふも穢らゝしい畜生めゝ指置て、さす敵ゝ此鷲塚時平が工み白狀せい、いやといへゞ刀の引導、どふ云や〳〵と立かゝる、ア、詞これ聊爾有な、主從の義を立ぬき、命ゞかへて云ぬゝ古風、いゝして置て

殺すも古風、あたらしう助る樣よ殘らずや、時平殿ゝ王位の望み、邪魔よなる菅丞相首取て立歸れ、軍陣の血祭して大望の旗を上げ、天皇親王院の御所、片はし仕廻ふて天下を一呑、身共も公家よ成樂しみ、空慨びの裏が來て、耻をさらす縛り繩、早ふはどいてくださりませと、時平が叛逆一〻殘らず、聞し召れし菅丞相、柔和の形相忽かゝり、ば睫よ血をそゝぎ、眉毛逆立ば憤り、都の方を睨付物ぐるゝしく立給へり、白太夫惝りし、去れて有時平が工、今聞たか何ぞの樣よ、ついぞ覺へぬこゝいお顏、爰から睨去やましても、都へゝ屆きませぬ、ば持病の癪が發れば、せゝ悲しうござりますと老のぐど〳〵物案じ、やおれ梅王白太夫、時平の大臣が謀叛の企、聞捨られぬば大事、赦免なければ歸洛も叶ゝず、王位を望む朝敵と去ろし召れぬ玉體危し、臣が忠義徒よ、此所よ朽果る、骸ゝ虛命蒙る共死たる後ゝ憚りなし、靈魂帝都よ立歸り帝を守護し奉らん天よ誓ひの我願ゝ

驗ゝ目の前白梅の氣條ぽつきと折取給ひ、朝敵一味の佞人原退治の手始め是見よと、枝ゑて丁と打給へゞ、平馬が首ゝ飛梅の氣條も花の亂れ燒、誠の劍も及びなき梅の名作ゝ手の中、親子ゝ恐るゝ計也、汝等、かゝる大事を聞からゝ、片時も早く都ゑ登時平が工み奏問せよ、我ゝ見上る此高山絶頂ゑ三日三夜、立行荒行根氣を碎き、梵天帝釋焰羅王三天王ゑ誓ひを立、魂魄雲井ゑ鳴雷十六萬八千の、首領と成て、眷屬引列都ゑ登り、謀叛の奴原引裂捨ん、現世の對面是迄也急ふれやつと御聲も供ゑ烈しきはやち風、吹立〳〵本堂の甍破れて庫裏方丈、蔀やり戸ゝ木の葉のごとく庭の立木も飛梅も、花も砂も吹しきる、親子も住寺も大きゑ驚き、期も來らざるゝ身を捨、天帝へ祈誓有、ゝ本意ゝ達する共、ゝ臺姫君若君のゝ歎きゝいか計りとゝまり給へとゝ袖ゑ、取付梅王白太夫、弓手馬手へ刎飛し、住僧いたくなとめ給ひそ、早天帝の惠ゑよつて、形ゝ此儘鳴神の、

ふしぎを見せんと散殘る、梅花を取て口ゑ含、天ゑ向つて白梅花、うづまく花びら火焔と成て、雲井遙ゑ行末ゝ怪し、恐ろし

「夢破る、門山伏が螺の貝吹立〳〵北嵯峨の、在も山家もぬけめなく、役の行者の跡を追、朝夕ゑてやる五器膳器、五器の實修行としられたり、ア、やかまし、ば奉禮殿貝吹て下さんな、頼ふだ方のお氣結ぼれ夜ゝろくゑば寐ならず、今とろ〳〵とお睡眠、ソレまだいの斷云ても聞入ぬ無法らい殿止めやらぬかそしてから不遠慮な、笠も脱ずゑ内へ這入、うそ〳〵と何見やる、女子計りと思やつたら當の槌が違ひましよ、サア出やらぬか、いよやらぬかと、呵り轉されば奉禮門へゝ出れど目ゝ跡ゑ、心殘して立歸る、ヤ、どんなやつがうせふつてば機嫌ゝいかゞぞと、障子のこなたゑ手をつかへ、思ひがけない螺の貝お目も覺ふ、お癖ゝのぼらぬか、八重ゐいかゞと尋れば、ソレバイナいつゑないば臺ゐすや〳〵と寐入ばな貝ゑ驚きなさ

れたか總身よ冷汗、思へば憎い山伏づら、わしも腹が立て、入る手の中もやらなんだと、二人が咄しよは臺所、なふ山伏の業でゝない恐ろしい夢を見て、動氣が今よ納らぬ、其夢の物語り、春も八重も聞てたも、所ゝ宰府安樂寺、連合のは秘藏が筑紫へ飛梅、梅王丸も一時よ下り合せたは悅び、梅ゝ飛櫻ゝかるゝ世の中よ、何とて松のつれなかるらんと即座のは詠歌、一字も忘れず覺へしゝ、物のゑらせの正夢か、まだ其上よ時平の家來、丞相樣を殺す工み、事顯ゝれて都の樣子、王位を奪ふ敵の企白狀するをお聞なされ、以ての外なお腹立、赦免なければ歸洛も叶ゝず、危いゝ天皇のお身の上、帝釋天へ祈誓をかけ鳴雷の神と成て、時平よ組せし同類共、蹴殺し捨んとお憤り、其すさましさ醜しさ夢とゝさらよ思ゝれずと語り給へば二人の女房、お禁じなさるゝは尤去ながら、逆夢とヤます れば却へてめでたいは吉左右、なふ春泡そふでないか、成程そふじや、追付

に歸洛なされませふ、さたが今來た山伏ゝら、編笠で顔も見せず物もいわず、うそ〳〵覗いていよおつたがいかよしても氣よかゝる、夫梅王殿の指圖よて此嗟峨よ入されず、に臺ゐのでざりまするをかぎ出しよ來た敵の犬、白大夫樣梅王殿も、筑紫へ下つて我〻ばかり、もふ爰よも置れませぬ、幸ひ頃日承われば、法性坊の阿闍梨樣、下嗟峨へ來てさやげな丞相樣とい師弟の約束、右の樣子を申上げに臺ゐのに事を、お頼み申てけふ中よ、早ふ所がかへましたい、わさや一走り往て來やんさよ、八重ゐ方よ心を付け、油斷して下さんすな、ヲヽ、春ゐのよふ氣が付た太儀ながらいて下さんせ、跡い氣づかひささやんすなと男勝りのかい〴〵しさ、に臺も異なふに悦び、コレ春、僧正樣よ逢つたら、夢の事もお咄し申、善悪の譯聞てたも、ヲヽ、何も角も心得ておりまする、兎角い緩りとして居られぬと抱へるやら笠取やら、追付吉左右かさらせと、こつ〳〵しててそ急ぎ行、

程も有せず時平が家來星坂源吾、あれこそ丞相のぼ臺よと手の者連てかけ入を、手早く八重ゝ長柳の長刀、ぼ臺を奥へと目でしらせ、何者なれゞ踏込で狼藉、目よ物見せんと振廻す、小さかしい女め、時平公の仰を請ぼ臺を迎ひよ來つたり、邪魔ひろがゞ討取と、下知よ隨ひつゞなの穂先切立〳〵、追まくれど多勢よ無勢數ヶ所の疵、長刀杖よ立歸り、ぼ臺ゐもふ叶ゝぬ、早ふ退て下さりませ、春ゐゝまだ歸らずか、エヽ口惜い〳〵、無念〳〵と云死よ、はかなき八重が最期の有樣、ぼ臺ゝ前後も辨へず死骸よ取付ぼ歎き、星坂透さず走り寄、引立行んとせし所よ、以前の山伏のつさ〳〵と顯れ出、其ぼ臺をとき料と、飛かゝつて源吾が首筋掴んで目より高く指上、冥途の旅へうせゐれと泥田の中へ頭轉倒、直よぼ臺を引だかへ石原砂道嫌ひなく飛がごとくよ、進み行一字千金、二千金三千世界の寶ぞと敬へる人よ習ふ子の中よ交ゝる菅秀才武部源藏夫婦

の者いたゝり傳き我子ぞと、人目ゑ見せて片山家、芹生の里へ所替、子供集て讀書の器用不器用清書を、顔ゑ書子と手ゑ書と人形書子ゝ天窓掻敎ゆる人ゝ取分て世話をかくとぞ見へゑける、中ゑ年かさ五作が息子コレ皆是見や、お師匠樣の留主の間ゑ手習するゝ大きな損、おりや坊主天窓の清書ゑたと、見せるゝ十五の涎くり若君ゝおとなしく、一日ゑ一字學べゞ三百六十字の敎へ、そんな事書ず共本の清書ゑたがよいと、八つゑ成子ゑ呵られて、ませよ〳〵と指ざして誂戲かゝるを殘りの子供、兄弟子ゑ口過す涎くりめをいがめてやろと、傳手ゑ壓上振廻す自然天然肩持も傳ふる筆の威德かや、主の女房奥より立出、又こりや例の闘諍かおとましや〳〵、けふゑ限つて連合の源藏殿、振舞ゑいてなれば戻りもゑれぬ、ほんゑ〳〵こなた衆で一時の間も待兼る、けふゝ取分寺入も有筈、晝からゝ休す程ゑ、皆精出して習た〳〵、又嬉しや休ゑやと、筆ゑ先

よ讀聲高く、いろはよ、此中はに人被下、一筆啓上　の男が肩よ堺重、文庫机を擔いせて利發らしき女房の七つ計りな子を連て、賴ませふと云入るゝ、内よもそれと早悟りこちへおはいり遊べせと、いふも云とやかく〳〵と愛よ愛持女子同士來た女房い猶笑面、私事い此村はづれよ、輕う暮しておる者でござりまする、此わんぱく者をお世話なされて下さりよかと、お尋ヤよおこしましたれば、おこせ世話云てやろと結構なお詞よわまへ、早速連て參じました、内方よもに子息樣がござりますげなが、どのお子でござりますぞ、ヤイ是が源藏殿の跡とりでござります、コレ〳〵よいお子樣や、外よも大勢の子達いかゐお世話でごよりまそよ、ヤイに推量なされて下さりませ、シテ寺入い此お子でござりますか、名い何とヤます、ヤイ小太郎とヤまして、わんぱく者でござります、イヤイヤけだかいよいお子や、折惡ふけふい連合源藏も、振舞よ參られました、是いヤお留主かいな、

お待遠なら私が呼よ參りまえよ、いへ〳〵幸ひ私も參つてくる所が有ば、其内よいお歸りでござりませう、コレ三助、其持て來た物あなたの傍へ上ませ、アット苔へて堺重樫よ乘たる一包、内儀の傍へ差出す、是ハ〳〵いハれぬ事を、イヤおはもじながら此子が參つたえるし、此堺重ハ子達への土産、取弘めて下さりませといハねど云れし蒸物煮染、我子よ世話を燒豆腐粒推茸の入たるハ奔走子とこそ見へよけれ、是ハ〳〵何から何迄取揃へてハ念の入た事、戻られたら見せませう、イヤモほんの心計宜しうお頼ア上ます、コレ小太郎ちよつと隣村迄いてくる程よ、おとなしうして待て居や、悪あがきせまいぞハ内證迄往て參じまえよと、表へ出れば小丁わしも行たいと、縋り付を振放し、嗜めよ、大きな形して跡追のか、ハらふじませまだ頑是がござりませぬ、ソリヤ道理いなドリヤおばがよい物やりまえよ、つい戻つてやらんせと、目で云らすれば〳〵つゐちよつと一走りと、跡追

子よも、引さるゝ、振かへり見返りて下部「引連急ぎ行、どりやこちの子と近付よと、若君の傍へ寄機嫌紛らす折からよ、立歸る主の源藏常よかゝりて色青ざめ、内入悪く子供を見廻し、氏より育といふよ、繁花の地と違ひ、いづれを見ても山家育世話がいもなき役よ立ずと、思ひ有げよ見へければ、心ならず女房立寄、いつよない顔色も悪し、振廻の酒機嫌かゝ云らぬが、山家育ゝ知て有子供、よくて口ゝ聞へも悪い、殊よけふゝ約束の子が寺入云て居まする、悪い人と思ふも氣の毒機嫌直して逢てやつて下されと、小太郎連て引合せど指煮いて思案の体、幼氣よ手をつかへ、師匠様今から頼み上ますと、いふよ及ぶずふり仰向急度見るゝ暫くゝ、打守り居たりしが、忽面色やゝらぎ、扨々器量勝れてけだかい生れ付、公家高家のに子息といふてもおそらく耻しからず、扨そなたゝよい子云やなふと、機嫌直れば女房も何とよい子よい弟子で、ござん云よお。

よい共〳〵上〻吉、其運て來たお袋い何國よ、ゥお前の留守なら其間よ隣村迄往て來といふてテ、夫もよし〳〵大極上先子供と奥へやり機嫌よふ遊ベし召れ、夫皆お隙か出た、小太郎俱よ奥へ〳〵と、若君諸共誘いせ、跡先見廻し夫よ向ひ、最前の顔色い常ならぬ吃相、合點の行ぬと思ふた所よ、今又あの子を見て打てかへての機嫌顔、猶以て合點行ずとふやら樣子が有そふな、氣づかひな聞してと問ベ源藏、ホ、ゥ氣づかひな筈、今日村の饗應と僞り某を庄屋の方へ呼付、時平が家來春藤玄番、今一人い菅丞相のゐ恩をきながら時平よ隨ふ松王丸、こいつ病ほうけながら見分の役と見へ數百人よて追取卷、汝が方よ菅丞相の一子菅秀才、我子としてかくまふよし訴人有て明白、急ぎ首討て出すや否や、但しふん込請取ふや、返答いかよとのつ引ならぬ手詰、是非よ及ベず首討て渡さふと請合た心い、數多有寺子の内、いづれ成共身がいりと思ふて歸る道すが

ら、われか是かと指折ても、玉簾の中の誕生と、孤垂の中で育つたとい、似ても似付ず、所詮は運の末成かいたいしや淺ましやと、屠所の歩みで歸りしが天道のひかへ強きよや、あの寺入の子を見れば、まんざら烏を鷺共云れぬ器量、一旦身がいりで欺き此場さへ遁れたらば直よ河内へお供する思案、今暫くが大事の場所と語れば女房待んせや、其松王といふやつい三つ子の内の、悪者、若君の顔いよふ見知て居るぞへ、サアそこが一かばちか、生顔と死顔い相顔のかいる物、面ざし似たる小太郎が首よもや贋とい思ふまじ、よし又夫と顯いれたらば松王めを眞二つ、殘る奴原切て捨、叶いぬ時い若君諸共、死出三途のは供と胸を居たが一つの難義、今よも小太郎が母親迎ひよ來たらば何とせん、此義よ當惑指當つたい此難義、イヤ其事い氣づかひ有な、女子同士の口先でちよつぱくさ欺して見よ、イヤ其手でい行まい大事い小事より顯いるゝ、事よ寄たら母諸共、エ、

こりややい、若君よゝ替られぬお主の爲を辨へよと、いふよ胸すへそふでござんす、氣弱ふてゝ仕損せん、鬼よ成てと夫婦いつゝ立、互よ顔を見合せて、弟子子といへゞ我子も同然、けふよ限つて寺入したいあの子が業か母ぢの因果か、報ひいこちが火の車、追付廻つて來ませふと、妻が歎けゞ夫も目をすり、せまじき物い宮づかへと俱よ涙よくれ居たる、かゝる所へ春藤玄番首見る役い松王丸病苦を助る駕乘物門口よ舁居れゞ、跡よゝ大勢村の者附隨ふてゞ上ます、皆是よおる者の子供が手習よ參つておりまず、若取違へ首討れてゝ取返しが成ませぬどふぞお戻し下されと、願へゞ玄番やかしまましい、蠅虫めら、うぬらが小悴の事迄身共がきつた事か、勝手次第よ遣うせふと、呵り付れゞ松王丸お待なされ暫くと、駕より出るも刀を杖、憚りながら彼等迚も油斷いならぬ、病中ながら拙者めが見分の役勤るも、外よ菅秀才の顔見きりし者なき故、今日

の役目仕課すれば病身の願ひに暇下さるべしと、有難き御意の趣疎ようい致されず、菅丞相の所縁の者此村ゑ置からい、百姓共もぐるゑなつて銘〻が盛ゑ仕立助けて歸る手も有事、コリヤやい百姓めら、ざい〳〵とぬかさず共一人づゝ呼出せ、面改めて戻してくりよと、のつ引させぬ釘鎹打ばひゞけの内ゑい夫婦、兼て覺悟も今更ゑ胸轟かす計也、表い夫共ゑらがの親仁門口ゑ聲高ゑ、長松よ〳〵と呼出せば、チツト答へて出てくるいわんぱく顔ゑ墨べつたり、似ても似付ぬ雪と墨是でいないと、敷しやる、岩松い居ぬかと呼聲ゑ、祖父樣何ゑやと行域て、出くる子供の頑是なき、顔い丸顔木みしり茄子、詮議ゑ及ばぬ連うせふと睨付られていや、嫁ゑもぐはさぬ此孫を命の花落遁れしと、祖父が抱へて走行、次い十五の涎くりぼんよ〳〵と親父か手招き、とゝよおれいもふ爰から抱れていのと、あまへる顔い馬顔で、聲嗄泣な、抱てやらふと干鮭を、猫なで親がくいへ行、

私が躾ん器量よしお見違へ下さるなと、斷いふて呼出すん、色白ぢろと爪實顔こいつ胡亂と引捕へ、見れば首筋眞黑く墨か黐かんぢらね共、こいつでないと突放す、其外山家奥在所の子供殘らず呼出して、見せても〳〵似ぬこそ道理土が產した斗芋子ばかりよつて立歸る、スハ身の上と源藏も妻の戸涙も胴を居、待間程なく入來る兩人、サア源藏、此玄番が目の前で討て渡そと請合た、菅秀才の首、サア請取ふ、早く渡せと手詰の催促ちつ共臆せず、假初ならぬ右大臣の若君、搔首捻首よも致されず、暫くんは用捨と立上るを松王丸、サア其手ンくンぬ、暫しの用捨と隙どらせ逃支度しても、裏道へん數百人を付置蟻の這出る所もない、生顔と死顔ん相顔がかんるなどゝ、身替りの贋首夫もたべぬ、古手な事ぢて後悔すなと、いんれてぐつとせき上いらざる馬鹿念、病ほうけた汝が目玉がでんぐり返り、逆樣眼で見やうんぢらず、紛れもなき菅秀才の首追付見せう、

其舌の根の乾かぬ内よ早く討、とく切と玄番が權柄、ハット計よ源藏ゝ胸を、居てぞ入よける、傍よ聞居る女房ゝ矣ぞ大事と心も空、撿使ゝ四方八方よ眼を配る中よも松王、机文庫の數を見廻し、ヤア合點の行ぬ、先達ていんだがき、らゝ以上八人、机の數が一脚多い、其躰ゝ何所よおるぞと、見咎られて戸涙ゝはつと、イヤ調こりやけふ初めて寺イヤ寺參りした子がござんす、何馬鹿な、ナ、それ〳〵、是が則菅秀才のお机文庫と、木地を隱した塗机ざつとさばいて云拔る、調何よもせよ隙どらすが油斷の元と、玄番諸共つつ立上るこなたゝ手詰命の瀬戸際、奥よゝばつたり首討音、はつと女房胸を抱ふん込足もけしとむ内、武部源藏白臺よ首桶乘て去づ〳〵出、目通りよ指置、是非よ及ばず菅秀才のに首討奉る、いゝゞ太切ないに首、性根をすへてサア松王丸去つかりと見分せよと、忍びの鍔元くつろげて、虚といゝゞ切付ん實といゝゝ助けんと堅唾を、呑で扣へ居る、調〻〻何の是去

きよ性根所か、今當はりの鏡よかけ、鉄札か金札か地獄極樂の境、家來源藏夫婦を取卷めされ、畏つたと捕手の人數十手振て立かゝる、女房戸涙も身を固め夫ゝ元より一生懸命、サア實檢せよ見分といふ一言も命がけ、後ゝ捕手向ふゝ曲者玄番ゝ始終眼を配り、爰ぞ絶体絶命と思ふ内早首桶引寄、蓋引明た首ゝ小太郎、贋といふたら一討と早拔かける戸涙ゝ祈願、天道樣佛神樣憐給へと女の念力、眼力光らす松王がためつすがめつ窺ひ見て、こりや菅秀才の首討たゝ、まがひなし、相違なしといふよも恂り源藏夫婦、傍きよろ〳〵見合せり、檢使の玄番ゝ見分の詞證據よ出かした〳〵よく討た、褒美よゝかくまふた科赦してくれる、イザ松王丸片時も早く時平公へお目よかけん、いか樣隙取てゝお咎めもいかゞ、拙者ゝ是よりお暇給はり病氣保養致たし、ナニ役目ゝ濟だ勝手よせよと首請取、玄番ゝ舘へ松王ゝ駕よゆられて立歸る夫婦ゝ、門の戸ぴつ去やり

玄め、物も得云ず青息吐息、五色の息を一時よはつと、吹出す計也、胸撫おろし源藏ハ天を拜し地を拜し、ヤ、調有がたや、忝や、凡人ならぬ我君のは聖德が顯ハれて、松王めが眼が眊若君と見定めて歸つたハ、天成不思議のなす所、は壽命ハ万〻年悦べ女房、調イヤもふ〳〵大抵の事玄やごんせぬ、あの松王めが眼の玉へ皆丞相樣がはいつてござつたか、但し首が黃金佛でハなかつたか、似たといふても瓦と金寶の花のは運開きと餘り嬉しうて涙がこぼれる、ハア、有がたや尊やと悦びいさむ折からよ小太郎が母いきせきと近ひと見へて門の戸たゝき、調寺入の子の母でござんす、今漸歸まましたと、いふ聲聞ゞ又惝まで、一つ遁れて又一つこまや、ハア何とどふせふと、妻が騷げど夫ハ胴すへ、コリヤ最前いふたハ爰の事、若君よハかへられぬ、狼狽者と戸涙を引退、門の戸ぐはらまと引明れバ女ハ會釋し、コレのまあ〳〵お師匠樣でござりますか、惡さをお賴申ます、どこよ居やるぞお

邪魔であろうと、いふを幸い、イヤ奥ゑ子供と遊んで居ます、連立て歸られよと眞顔でいへば、そんなら連て歸りまゑよと、ずつと通るを後ろより只一討と、切付る女も ゑれ者ひつぱづし逃ても逃さぬ源藏が刄するどに切付るを我子の文庫ではつしと請とめ、コレ待た待んせこやどふゑやと、刎る刄も用捨なく又切付る文庫ハ二つ、中よりばらゝと經帷子、南無阿彌陀佛の六字の幡顯れ出しハコハいかゑと、不思議の思ひゑ釼もなまりすゝみ兼てぞ見へゑける、小太郎が母涙ながら、若君菅秀才のお身がハり、お役ゑ立て下さつたか、まだか樣子が聞いといふゑ恂り、ジテ夫ハ得心か、得心なゝやこそ此經帷子六字の幡ムシ ゑて其元ハ何人のほ內證と、尋る內ゑ門口より、梅ハ飛櫻ハかるゝ世の中ゑ、何とて松のつれなかるらん、女房悅べ躰ハお役ゑ立たぞと、聞ゑゝわつとせき上て前後不覺ゑ取亂す、ヤア未練者めと呵付、ずつと通るハ松王丸、見るゑ夫婦ハ二

度恍り、夢か現か夫婦かと靷れて、詞もなかりしが、武部源藏異儀を正し、
一禮ゝ先跡の事、是迄敵と思ひし松王打てかゝつた所存ゝいかゞ不審
さよと尋れば、ア、は不審尤存じの通り我〻兄弟三人ゝ、めい〳〵ゞ別れ
て奉公、情なや此松王ゝ、時平公ゞ隨ひ親兄弟共肉縁切、は恩請た丞相樣
へ敵對主命といひながら皆是此身の因果、何とぞ主從の縁切んと、作
病構へ暇の願ひ、菅秀才の首見たらば暇やらんと今日の役目、よもや貴
風が討ゝせまい、なれ共身がゝりゞ立べき一子なくばいかゞせん、爰ぞ
は恩報ずる時と、女房千代と云合せ、二人の中の胎をば、先へ廻して此身
がゝり、机の數を改めしも、我子ゝ來たかと心の著、菅丞相ゞゝ我性根を
見込玉ひ、何とて松のつれなからふぞとのは歌を松ゝ、難面〳〵と、世上
の口ゞかゝる悔しさ、推量有源藏殿、躰がなくばいつ迄も人でなしとい
はれんゞ、持べきものゝ子なるぞやと、いふゞ女房猶せき上、草葉のかげ

で小太郎が聞て嬉しう思ひまゑよ、持べき物い子なるといあの子が爲よよい手向、思へば最前別れた時いつよない跡追たを、呵つた時の其悲しさ、冥途の旅へ寺入と早虫が云らせたか、隣村へ行といふて、道迄いんで見たれ共、子を殺さしよおこして置て、どふ〻内へいなるゝ物ぞ、死顔成共今一度見たさよ未練と、笑ふて下さんすな、包みし祝儀いあの子が香奠四十九日の蒸物迄持て寺入さすと云、悲しい事が世よ有ふか、育も生れも賤しくば、殺す心も有まいよ、死る子い媚よしと美しう生れたが、可愛や其身の不仕合せ、何の因果よ苞瘡迄、仕廻た事ゑやとせき上てかつぱと伏て泣ければ、俱よ悲しむ戸涙い立寄、最前よ連合の身がいりと思ひ付た傍へ往てお師匠様今から頼み上ますと、いふた時の事思ひ出せば他人のわしさへ骨身が碎ける、親にの身でいお道理と涙添れば、是ぢ内證、コリヤ女房も何でほへる、覺悟ゑたぢ身がいり、内で存分ほへたで

ないか、は夫婦の手前も有、イヤ何源藏殿、ヤ付ていおこしたれ共定めて最期の節、未練な死を致したでは、ざらふ、イヤ若君菅秀才のは身がいりと云聞したれば、潔ふ、首指のべ、アノ逃隠れも致さずよつこりと笑ふて、ハヽヽ出かしおりました、利口なやつりつぱなやつ、健氣な八つや九つで親よかいつて恩送り、お役よ立い孝行者手柄者と思ふから、思ひ出すい櫻丸、は恩も送らず先達し嘸や草葉のかげよりも、羨しかろ、けなりかろ、夢が事を思ふよ付思ひ出さるゝ〳〵と、流石同腹同性を忘れ兼たる悲歎の涙、なふ其伯父はよ小太郎が、逢ますわいのと取付てわつと計よ、泣沈む、歎きも漏て菅秀才一間の内より立出給ひ、我よかいると知ならば此悲しみいさすまいよ、可愛の者やとは袖を左ぼり給へば夫婦いはつと俱よ浸する有がた涙、次手ながら若君様へは土産と松王つゝ立、ヤ付た用意の乘物早く〳〵と呼はるよぞ、ハット答へて家來共は目通りよ舁居る、早

は出と戸を開けば菅丞相のは臺所、ウ母ゐか我子かとは親子不思議のは對面、源藏夫婦横手を打、方〳〵とは行衛尋しよ、いづくよかは座なされし、サレバ〳〵北嵯峨のは隱れ家、時平の家來が聞出し召捕よ向ふと聞、某山伏の姿と成危い所奪取たり、急ぎ河内の國へは供なされ、姫君よもは對面コリヤ〳〵女房、小太郎が死骸あの乘物へ移し入、野邊の送り營まん、アイと返事の其中よ戸涙が心得抱てくる、死骸を簾篠の乘物へ乘て夫婦が上着を取ば、哀れや内より覺悟の用意、下よ白無垢麻上下、心を察して源藏夫婦、野邊の送りよ親の身で子を送る法ハなし、我〻夫婦がかハらんと立寄ば松王丸、イヤ〳〵是ハ我子よ有ず、菅秀才の亡骸をは供ヤ、いづれもハ門火〳〵と門火を、頼み頼まるゝ、は臺若君諸共よ、去やくり上たるは涙、冥途の旅へ寺入の、師匠ハ彌陀佛釋迦牟尼佛、六道能化の弟子よなり、さいの川原で砂手本、いろは書子をあへなくも、ちりぬる命、是非もなや、あす

の夜たれか添乳せん、らむ憂目見る親心、劔と死出のやまけこへ、おさき夢見し心地して跡い、門火よゑひもせず、京い故郷と立別れ鳥邊野、さして連歸る

○第五

雲井長閑き大内山早立かいる水無月下旬、日毎〳〵よ時違へず電光雷火霹靂、打續いての天變只事ならず、玉体安全雷除の加持有んと勅使三度の召よ應じ、法性坊の阿闍梨參内有紫宸殿よ檀を構へ幣帛押立、獨鈷三鈷鈴錫杖ふ〻立〳〵祈らるゝ、擁護も嘸と云られける、寛平法皇のは使として判官代輝國、齋世親王苅屋姫菅秀才を伴ひは階のもとよ伺公する、僧正檀よりおり給ひ能こそ參内ましませしと、親王のは手を取上座よ移し參らすれば、輝國階下よ頭をさげ、兼て法皇貴僧よ談じ給ひし通り菅秀才よ菅原の家相續、天機宜しき次手を以ては沙汰有て給いり

しか、承ハつて參れとの使ぞふと述けれバ親王も僧正ヨ向ハせ給ひ、此度の天變察する所、無實の罪ヨ沉んだる菅丞相の所爲なるべし、此靈魂を鎭めんヨハ法皇の仰のごとく、菅秀才が勅勘を赦され、菅家再び取立給ハゝ亡魂も恨を晴し、天下万民の悅び是ヨ云かじ、偏ヨ貴僧を賴み入次ヨハ麿が虛命の逆鱗ヲ晴して給ハれと事叮嚀ヨ述給へバ、仰のごとく菅丞相恨ハ晴ぬ天變不順、愚僧元來菅丞相とハ師弟の中、靈魂の怒りを休むる菅原の家相續、宜しく奏し奉らん法皇ハ所へも此通り、輝國ヲ上らるべし各ハこなたへと、打連奥ヨ入給へバ判官代大きヨ悅び、僧正のハ請合法皇ヨヲ上、追付參上仕らんと心いそ〳〵立歸る齋世親王菅家の兄弟密ヨ參內致せしと、春藤玄番が云らせヨよつて、時平の大臣大きヨ驚き、希世清貫前後ヨ隨へ遯散ヨかけ來り、寢殿遙ヨ窺ひ見れバ、實も玄番がヲヨ違ハず、時平が怨と成やつばら片端打殺し、天皇法皇遠島

させ我萬乘の位よつかん、清貫希世ぬかるなと八方へ眼を配り、事を窺ひ待共えらず判官代い歸りしかと、奥ゑ出る菅秀才、こと時平がかけ聲よ、左中辨つゝと寄小腕取て捻伏たり、時平の大臣から〳〵と打笑ひ、蠅同然の小輸なれ共生置てい後日の怨首討たると思ひしよ小ざかえく も我を謀り今日迄存命せしい松王めが計ひよな贋首喰たうつそりめと、春藤玄番が肩骨つかみ不忠油斷の見せしめと首引拔てかしこへ投捨、〳〵兩人此小輸い磨よ任せ、齋世親王かりや姫引立參れと下知するよゞ、清貫希世心得しと奥をさして行所よ俄よ晴天かき曇り風雨發つて絶間なく電光虚空よひらめき渡り、天地も崩るゝ大雷ばち〳〵〳〵ぐいら〳〵〳〵二人いがち〳〵胴震ひ色青さめて逃まどふ、時平の大臣いびく共せず、臆病な腰拔共、鳴ぺなれ落ぺ落よ雷神雷火も足下よかけ踏消てくれんず物と菅秀才を小脇よかい込、虚空を睨でつと立

たり、猶もはためく震動雷電希世い生たる心地なく、階の下よかゝみ居る頭の上よ車輪の火の玉、落るとみへしが左中辨五體炎よ燃爛天罰日の前師匠の罰心地よかりし最期也、是よも屈せぬ強氣の時平、三善の清貫いづくよ有、麿よ敵する雷神なし、こいくべ爰へ來れよと、呼を力よ立寄清貫、あいやと三善も雷火よ打れ即時よ息い絶果たり、二人が最期よさしもの時平、心臆して膝わな〳〵、擒よしたる菅秀才逃て、行衛も去らばこそ、此上頼い法力と檀上にかけ上り、兩手を覆ふて踞る、左右の耳より尺餘の小蛇顯いれ出れば悶絶しうんとのつけよ反かへれば、二疋の小蛇い拔出て檀よ立たる幣帛よ、入よと見へしが忽よ此世を去し櫻丸夫婦が姿と顯れ出、かげのごとく檀上よすつくと立、腹立や恨めしや、汝故よ菅丞相無實の罪ようき去づみ、心筑紫よ果給ふ、其怨念い、晴やらぬ空よ轟き、鳴神の炎變じて紅櫻と、俱よちらさん來れや來れと頭を、掴

んで引立る音よ驚き法性坊紫宸殿よかけ出て見給へば、物の怪の姿ハあり〳〵有明櫻祈加持して退んず物と、珠數さら〳〵と、押もんで、千手の陀羅尼くりかけ〳〵、祈いのれば時平ハ夢共現共、思ハず立上れば櫻夫婦が妄執の雲霧よ隔られ形ハ見へて手よ取れず逃んとするを、逃さじと向ふよれちまち八重一重乃よかゝり此世をさり、かばねハ終よ呵責の火櫻、此身を焦す鹽釜櫻、いかよ僧正祈る共、此怨念ハいつ迄ハ、付まとハつて糸櫻退じ放れじ幻ハうて共さらぬ犬櫻、死靈を去さで置べきかと、揉かけ〳〵祈玉へば夫婦が靈魂イヤ〳〵〳〵いか程いのる共、我〳〵諸共冥途の苦息見すべしと寄ば、いのり祈れば形ハ見へつ隱れつ九重の、彼岸櫻とちり〳〵よ僧正の殊數先へ恐れて寄ぬぞ不思議なる紫宸殿よ僧正あれば、弘徽殿よ夫婦の姿、弘徽殿よ移り玉へば、清涼殿よ死靈の形清涼殿よ移り玉へば、なしつぼ、梅つぼ、夜のゐ殿晝のゐ座、行違ひ

行廻り、祈るゝ僧正、去ぬゝ怨靈もみ合〳〵、祈伏られ櫻丸、詞〳〵僧正菅丞相を讒言し、帝位を奪ふ時平を助け玉ふゝ心得ず、扨ゝ貴僧も朝敵よ力を添玉ふ、かゝと、聞より僧正大きよ驚き、ヤアかゝる天下の怨共ゑらで、殊勝をけがせし勿躰なやと法座を立去入玉へゞ、時平も恐れ諸共よゐ座の間さして逃入を、たゞさを取て引戻し、今こそゝ思ひの儘、冥途の闇路よ伴ゝんと、櫻の枝のゑもとをふり上追立〳〵、追廻し笞を持つて丁〳〵、打れて現空蟬の蛻の體、扨こそ恨晴たりと死靈ゝ時平を庭上よ、どふと蹴落し嬉しげよ、形ゝ花の散ごとく、消て見へねゞ丞相の、靈も鎮まり空晴て日輪光り暉けり、斯と見るゟ菅秀才かりや姫庭上よ走り出、父上の敵遁さじと用意の懐劍拔放し、恨の刀思ひゑれと、指通し〳〵悦び給ふ折こそ有、宮ゐ夫婦若君の安否いかゞと松王丸輝國伴ひ參内すれゞ、白太夫梅王も宰府より立歸りゐ階の下よ伺公して、櫻丸夫婦が怨念

時平が悪事を顯はせし、子細を聞より人〻喜悅俱に悅び法性坊親王を伴ひ立出給ひ、人〻の願ひのごとく、菅秀才に菅原の遺跡を立させ、菅丞相に正一位の贈官有、右近の馬場に社を築、南無天滿大自在天神と崇め、皇居の守護神たるべしとの宣旨也と述給へば、皆一同に悅びをきくに北野の千本松、榮へ榮ふるは社に千年万年朽せぬ宮殿錦の帳玻璃の柱、瑪瑙の梁瑠璃の垂木、廻廊拜殿有〻と拜れさせ給ひける、京に北野難波に天滿神德奇瑞並びなく、榮へ在す此は神緣起をあら〳〵書殘す筆の冥加やは傳授の、傳はる和國に炳然威德を、崇奉る

延享三年丙寅秋八月廿一日

菅原傳授手習鑑終

明治廿四年四月廿七日印刷
明治廿四年四月　日出版

編輯兼發行者　日本橋區通四丁目四番地　內藤加我

印刷者　日本橋區新和泉町一番地　瀧川三代太郎

發兌　日本橋區通四丁目四番地　金櫻堂